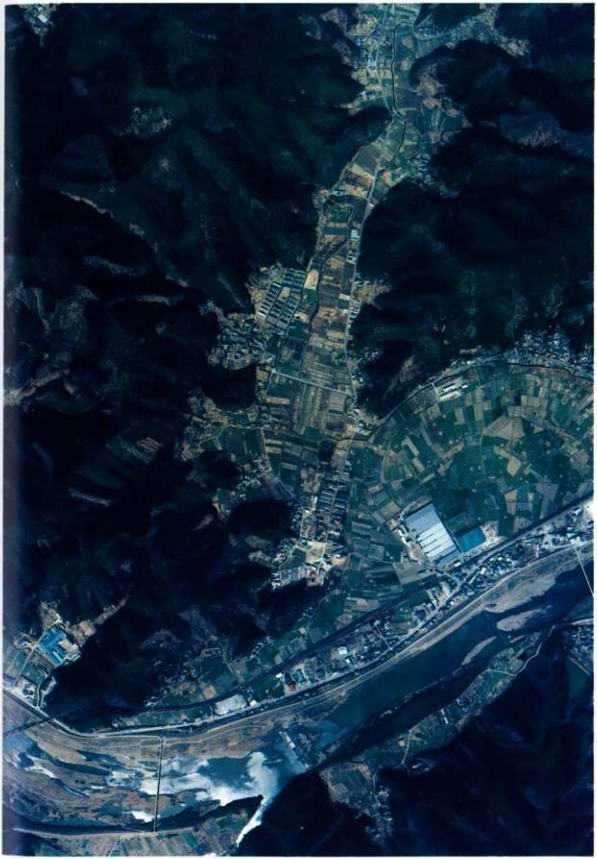
とがむれじょうあと
栂牟礼城跡関連遺跡発掘調査報告書

佐伯地区遺跡群発掘調査報告書

1994

佐伯市教育委員会



柯牟礼山周辺航空写真

序

栂牟礼城は中世、佐伯一帯を治めていた佐伯氏の手により築かれたものとされていますが、佐伯地方には中世の古文書がほとんど残されておらず、その実態は不明な部分が多いという現状にあります。

佐伯市では平成元年度より国庫補助金を得て、この栂牟礼城および関連の遺跡の実態を明らかにするために、発掘調査を行ってまいりました。

遺跡の保護とは、遺跡そのものを単に物理的に保存していくだけではなく、その実態を明らかにし、かつ調査成果を広く公開していくことが肝要であると考えられます。

今回の一連の発掘調査により、栂牟礼城を中心とした周辺城下町の様相の一部を垣間見ることができますが、これもひとえに終始暖かく調査をご指導いただきました調査指導員の先生方と大分県教育委員会の皆様、ならびに今回の調査に対する地元の方々のご理解とご協力の賜物であります。

衷心より感謝の意を表し、発掘調査報告書発刊のご挨拶とさせていただきます。

平成６年３月

佐伯市教育委員会
教育長　鳥　井　喜久太

例　言

1、本書は佐伯市教育委員会が国庫補助金を得て実施した大分県佐伯市所在の佐伯地区遺跡群発掘調査報告書である。

2、調査は大分県教育庁文化課の指導のもと佐伯市教育委員会が主体となり実施した。

3、遺構・遺物の実測は各年度の調査担当者が中心に行い、本書の執筆は各担当者が分担し、文末に執筆者を明記した。なお、調査指導員である海老沢衷氏から本報告書に対し玉稿を賜り、また、現在、当職にない〆野勝教（現、大分県安心院町教育委員会社会教育課主事）・新宅信久（現、福岡県粕屋町教育委員会社会教育課主事）・河野史郎（現、佐賀県神崎町教育委員会社会教育課主事）各氏には原稿執筆をはじめ多大な御協力をいただいた。さらに高橋信武（大分県教育庁文化課埋蔵文化財第１係主査）・後藤幹彦（現、大分県大野町教育委員会社会教育課嘱託）両氏にも執筆いただいた。併せて記して謝意を表したい。

4、本文中の遺構番号については、個々の調査で用いたものに準拠した。なお、本文中で使用する略号は以下のとおりである。

ＳＢ－掘立柱建物跡、ＳＫ－土坑、ＳＰ－柱穴、ＳＸ－その他の遺構

5、本書の編集は原田昭一が行った。

目　次

第１章　はじめに …… 1

1　調査の経過と概要(山田健一・原田昭一) …… 1

2　調査団の構成(山田・原田) …… 1

3　栂牟礼城および周辺の歴史的環境(原田) …… 3

4　文献に見える佐伯氏の動向(山田・原田) …… 4

第２章　発掘調査の成果 …… 10

1　長畑地区の調査(綿貫俊一・〆野勝教・河野史郎) …… 10

2　掃木地区の調査(綿貫) …… 13

3　下掃木地区の調査(新宅信久) …… 16

4　天神ノ下地区の調査(新宅) …… 17

5　引地地区の調査(綿貫・高橋信武) …… 17

6　引地下地区の調査(綿貫) …… 19

7　古市地区の調査(新宅) …… 20

8　栂牟礼城跡の調査(原田) …… 24

第３章　まとめ（原田） …… 31

第４章　付論 …… 37

1　栂牟礼城の堀切り・竪堀群とその歴史的性格(海老沢　衷) …… 37

2　山上寺跡出土の中世遺物について(綿貫・後藤幹彦) …… 43

3　佐伯城下町遺跡天祐館跡の調査(村上久和) …… 68

挿 図 目 次

第１図　椙牟礼城跡周辺遺跡分布地図 …… 8
第２図　佐伯市上岡・稲垣・鶴望地区小字配置およびトレンチ位置図 …… 9
第３図　長畑地区平成元年度トレンチ遺構配置図 …… 10
第４図　長畑地区平成元年度トレンチ出土遺物 …… 10
第５図　長畑地区平成２年度トレンチ遺構配置図 …… 11
第６図　長畑地区平成２年度トレンチ出土遺物 …… 12
第７図　掃木地区トレンチ配置図 …… 13
第８図　掃木地区６トレンチ遺構配置図 …… 13
第９図　掃木地区７トレンチ遺構配置図 …… 14
第10図　掃木地区８トレンチ遺構配置図および拡大図 …… 14
第11図　掃木地区９トレンチ遺構配置図 …… 14
第12図　掃木地区10トレンチ遺構配置図 …… 15
第13図　掃木地区出土遺物 …… 16
第14図　ＳＰ１出土遺物 …… 16
第15図　下掃木地区１トレンチ遺構配置図 …… 16
第16図　天神ノ下地区トレンチ配置図 …… 17
第17図　天神ノ下地区３トレンチ北壁土層図 …… 17
第18図　３トレンチⅣ層出土遺物 …… 17
第19図　３トレンチⅤ層出土遺物 …… 17
第20図　引地（愛宕神社境内）地区トレンチ配置図 …… 18
第21図　引地（愛宕神社境内）地区出土摺鉢 …… 18
第22図　引地（愛宕神社境内）地区出土陶磁器 …… 19
第23図　引地下地区１トレンチ遺構配置図 …… 21
第24図　古市地区トレンチ配置図 …… 22
第25図　古市地区１トレンチ遺構配置図および土層図 …… 22
第26図　古市地区１トレンチ中世ピット内出土遺物 …… 22
第27図　古市地区１トレンチⅢ層出土遺物（１） …… 23
第28図　古市地区１トレンチⅢ層出土遺物（２） …… 23
第29図　古市地区１トレンチⅢ層出土銅銭 …… 24
第30図　古市地区２トレンチ遺構配置図および土層図 …… 24
第31図　古市地区２トレンチ出土遺物 …… 25
第32図　椙牟礼城跡10トレンチ出土遺物 …… 26
第33図　椙牟礼城跡９トレンチ出土遺物 …… 26
第34図　椙牟礼城跡８トレンチ出土備前焼大甕 …… 26
第35図　椙牟礼城跡８トレンチ出土遺物 …… 26
第36図　椙牟礼城跡縄張り配置図 …… 27・28
第37図　椙牟礼城跡トレンチ配置図 …… 29
第38図　椙牟礼城跡堀切り・堅堀配置図 …… 41・42
第39図　山上寺周辺の遺跡分布図 …… 44
第40図　山上寺跡境内模式図 …… 45
第41図　山上寺跡出土銅鏡拓影図と断面図（その１） …… 47
第42図　山上寺跡出土銅鏡拓影図と断面図（その２） …… 48
第43図　山上寺跡出土銅鏡拓影図と断面図（その３） …… 49
第44図　山上寺跡出土銅鏡拓影図と断面図（その４） …… 50
第45図　山上寺跡出土銭貨鋳造国別比較図 …… 51
第46図　山上寺跡出土銭貨銭種別比較図 …… 53
第47図　山上寺跡出土銭貨拓影（１） …… 55
第48図　山上寺跡出土銭貨拓影（２） …… 56
第49図　山上寺跡出土銭貨拓影（３） …… 57
第50図　山上寺跡出土銭貨拓影（４） …… 58
第51図　山上寺跡出土銭貨拓影（５） …… 59
第52図　山上寺跡出土星形孔銭拓影 …… 60
第53図　佐伯市城下町遺跡（天祐館跡）グリッド・トレンチ位置図 …… 68

写真図版目次

巻頭図版　椿牟礼山周辺航空写真（カラー）
図版 1　長畑地区平成元年度トレンチ遺構検出状況 …… 33
長畑地区平成２年度トレンチ遺構検出状況 …… 33
長畑地区平成２年度トレンチ遺構検出状況 …… 33
長畑地区ＳＫ６遺物出土状況 …… 33
掃木地区６トレンチ遺構検出状況 …… 33
掃木地区６トレンチＳＰ３青磁出土状況 …… 33
掃木地区７トレンチ北壁土層状況 …… 33
掃木地区７トレンチ遺物出土状況 …… 33
図版 2　掃木地区９トレンチ遺構検出状況 …… 34
掃木地区10トレンチ遺構検出状況 …… 34
掃木地区10トレンチＳＫ１検出状況 …… 34
下掃木地区１トレンチ完掘状況 …… 34
天神ノ下地区３トレンチ北壁土層状況 …… 34
引地地区（愛宕神社境内）全景 …… 34
引地・引地下地区遠景 …… 34
引地下地区遺構検出状況 …… 34
図版 3　古市地区１トレンチ近世遺構検出状況 …… 35
古市地区１トレンチ包含層遺物出土状況 …… 35
古市地区１トレンチ中世遺構検出状況 …… 35
古市地区１トレンチＳＰ15遺物出土状況 …… 35
古市地区１トレンチＳＫ１検出状況 …… 35
古市地区１トレンチ北壁土層状況 …… 35
古市地区２トレンチ遺構検出状況 …… 35
古市地区２トレンチＳＸ１遺物出土状況 …… 35
図版 4　古市地区２トレンチＳＸ１遺物出土状況 …… 36
古市地区２トレンチ遺構完掘状況 …… 36
古市地区２トレンチ西壁土層状況 …… 36
古市地区２トレンチ東壁土層状況 …… 36
椿牟礼城跡曲輪２近景 …… 36
椿牟礼城跡主郭10トレンチ完掘状況 …… 36
椿牟礼城跡曲輪２、７トレンチ完掘状況 …… 36
椿牟礼城跡曲輪３、８トレンチ遺物出土状況 …… 36
図版 5　曲輪４ゾーンのＧ（七ツ掘口の大堀切り） …… 40
図版 6　曲輪３ゾーンのＣ（曲輪３の下の堀切り） …… 40
図版 7　山上寺跡出土の鏡 …… 65
図版 8　菖蒲双雀双蝶文鏡・竹垣菖蒲双蝶文鏡 …… 66
図版 9　菊花散双雀文鏡・松喰鶴鏡 …… 67
図版 10　石列および礎石検出状態 …… 68

表　目　次

第１表　長畑地区平成２年度トレンチ出土遺物観察表 …… 12
第２表　天神ノ下地区３トレンチ北壁土層観察表 …… 17
第３表　引地地区出土遺物観察表 …… 20
第４表　山上寺跡出土銭貨一覧 …… 52
第５表　山上寺跡出土銭貨背文一覧 …… 59
第６表　湖州鏡出土年表 …… 61
第７表　記年銘経塚（経筒）と共伴鏡の出土年表 …… 62

第1章　はじめに

1　調査の経過と概要

佐伯市は大分県東南部に位置し、豊後水道に面するリアス式海岸の湾奥に広がる県南部の拠点的都市である。この佐伯市には中世、佐伯一帯を治めていた佐伯氏により築かれたとされる栂牟礼城が存在する。中世城郭として、その景観の壮麗さをはじめ周辺城下町を含めた学術的価値は計り知れないものがあり、地元佐伯市における文化財のなかではシンボル的存在として位置付けられている。このように歴史的に高く評価されるべき地域でありながら、近年の宅地造成・道路建設など開発の手が及び、遺跡自体、蚕食されながらその姿を失いつつある。そのため、栂牟礼城周辺遺跡に対して遺跡の広がりをはじめ、遺跡の時期や性格、その密度など遺跡を理解するための基礎的データーを得る試掘調査を実施する必要性に迫られた。それゆえ、佐伯市教育委員会では昭和63年度に市の単費で行った第1次発掘調査に引き続き、平成元年度以降、平成5年度まで国庫補助金を得て6次にわたる栂牟礼城及び周辺遺跡の調査を実施した。

以下、各年度の概要を示す。

《平成元年度》

佐伯市大字稲垣字引地下・引地・掃木・長畑および大字堅田の字山城跡における試掘調査を実施した。稲垣字引地下・掃木・長畑では中世に属するものと考えられるピット群を検出し、出土遺物として土師質土器・瓦質土器・青磁・土錘などを確認した。また、稲垣字引地では明確な遺構は確認できなかったが、近世後半期の陶磁器類が多量に出土した。一方、大字堅田の字山城跡では現地形に中世城郭の景観が確認できるが、試掘調査の結果、明確な遺構・遺物の確認はできなかった。

《平成2年度》

佐伯市大字稲垣字長畑・下掃木・天神ノ下・古市の試掘調査を実施した。字長畑ではピット・溝状遺構・土坑などが検出され、中世後半期の土師質土器・輸入陶磁器が出土している。字下掃木においてもピットを検出し中世後半期の備前焼擂鉢片を確認した。一方、字天神ノ下では旧水田層を確認したが、水田層下の遺物包含層から多くの中世期の遺物が出土した。また、字古市では中世前半期と近世後半期の2時期の遺構・遺物群を確認した。

《平成3年度》

栂牟礼城跡の航空写真撮影による500分の1地形図の図化及び縄張り配置図の作成を行った。

《平成4年度》

栂牟礼城主郭・曲輪2・曲輪3の試掘調査を行った。いずれも表土下に地山が広がり、明確な遺構は確認できなかったが、15～16世紀の遺物が若干であるが出土した。

《平成5年度》

栂牟礼城跡関連遺跡発掘調査報告書作成を行うとともに、市立美術館建設予定地である佐伯城下町遺跡の一部、天祐館跡の試掘調査を行なった。

2　調査団の構成

調査団の構成は以下のとおりである。

平成元年度

調査主体	佐伯市教育委員会
調査指導員	賀川光夫　別府大学教授
	海老沢　衷　早稲田大学講師
調査員	大分県教育庁文化課

埋蔵文化財第一係係長　清　水　宗　昭
同　　主事　綿　貫　俊　一

調査事務　佐伯市教育委員会
教　育　長　鳥　井　喜久太
社会教育課課長　御手洗　正　明
同　課長補佐　田　嶋　栄　治
同　副主幹　山　田　健　一

平成2年度

調査主体　佐伯市教育委員会
調査指導員　後　藤　宗　俊　別府大学教授
海老沢　　衷　早稲田大学助教授
調　査　員　大分県教育庁文化課
埋蔵文化財第一係係長　清　水　宗　昭
同　　嘱託　新　宅　信　久
同　　嘱託　後　藤　幹　彦
同　　嘱託　阿　部　みゆき
佐伯市教育委員会
調査員　河　野　史　郎
調査事務　佐伯市教育委員会
教　育　長　鳥　井　喜久太
社会教育課課長　御手洗　正　明
同　課長補佐　田　嶋　栄　治
同　副主幹　山　田　健　一

平成4年度

調査主体　佐伯市教育委員会
調査指導員　後　藤　宗　俊　別府大学教授
海老沢　　衷　早稲田大学助教授
千　田　嘉　博　国立歴史民俗博物館助手
調　査　員　大分県教育庁文化課
主幹兼埋蔵文化財第一係係長　清　水　宗　昭
同　　主査　宮　内　克　己
同　　主任　原　田　昭　一
調査事務　佐伯市教育委員会
教　育　長　鳥　井　喜久太
社会教育課課長　田　嶋　栄　治
同　課長補佐　大　賀　重　行
同文化係係長　野　口　俊　一
同　副主幹　山　田　健　一

平成5年度

調査主体　佐伯市教育委員会
調査指導員　後　藤　宗　俊　別府大学教授
海老沢　　衷　早稲田大学助教授
千　田　嘉　博　国立歴史民族博物館助手
調　査　員　大分県教育庁文化課
主幹兼埋蔵文化財第1係係長　清　水　宗　昭

同　　第2係係長　渋　谷　忠　章
埋蔵文化財第2係主査　村　上　久　和
同　　第1係主任　原　田　昭　一
調査事務　佐伯市教育委員会
教　育　長　鳥　井　喜久太
社会教育課課長　田　嶋　栄　治
同　課長補佐　大　賀　重　行
同文化係係長　野　口　俊　一
同　副主幹　山　田　健　一

3　栂牟礼城および周辺の歴史的環境

栂牟礼城は佐伯市と弥生町の市町境に位置する標高223.7mの栂牟礼山一帯を利用して築城されている。佐伯市は豊後水道にのぞむ複雑なリアス式海岸に面しており、この豊後水道に注ぐ番匠川・堅田川・木立川下流域に広がる沖積平野に発展した市街地を中心とする。また弥生町は番匠川中上流域の谷部に広がる沖積平野に散在する集落からなり、佐伯市・弥生町とも平野部に近接して丘陵部が張り出す地形的特徴をもつ。

佐伯市・弥生町の遺跡の分布をみると、縄文時代には押型文土器をはじめとした縄文時代早期の土器の出土が若干指摘されているものの、白潟遺跡において少量の縄文時代後期の土器が出土しているのみであり、本格的な縄文時代遺跡の発掘調査は今後に委ねられる状況にある。

弥生時代に目を移すと、当地域の埋蔵文化財調査において、まず注目させられるのは佐伯市下城遺跡・長良貝塚・白潟遺跡であろう。これらの遺跡は沖積平野に隣接する台地・微高地上に位置しているが、下城遺跡では弥生時代前～中期の集落跡が調査され、東九州の弥生時代前～中期を代表する土器型式である「下城式土器」として知られた標式遺跡として名高い。下城遺跡では弥生時代前～中期に帰属するとされる貝塚をはじめ掘立柱建物跡4棟、および製鉄跡とみられる竪穴が1基確認されている。また、長良貝塚においても弥生時代のものとされる貝層中から鉄滓・鉄鏃が出土している。これらの製鉄遺跡の遺構・遺物は近年全国各地において飛躍的に増加した資料から判断すれば、下城遺跡出土のフイゴ羽口・釘・鉄片などの出土は鍛冶工房の様相を呈し、製鉄遺構が掘立柱建物の帰属時期もあわせて後世の所産である可能性が高く、当遺跡は弥生時代以降の複合遺跡であると考えられる。しかも、その広がりが長良貝塚などからも出土していることから、佐伯地域の比較的広範囲に製鉄遺跡の広がりが想定できよう。白潟遺跡にしても弥生時代の貝塚・竪穴住居跡をはじめ掘立柱建物跡や蔵骨器が出土しており、弥生時代以降の複合遺跡であることがわかる。

古墳時代には島嶼部・河口部に古墳が営まれ、海を舞台に活躍した人々の足跡が確認できる。現在、沖積作用および海岸部の埋め立てなどにより当時とは異なる地理的状況を呈するが、当時からすれば東島古墳石棺・宝剣山古墳は湾岸部に浮かぶ島嶼部に、また岡ノ谷古墳・岩清水古墳は湾口部を見下ろす丘陵部に築造されている。宝剣山古墳では凝灰岩製の箱式石棺より三角板鋲留短甲をはじめ鉄剣・鉄鏃・鉄刀など当地域の古墳において最も注目すべき遺物の出土がみられる。このほかには弥生町上小倉横穴墓群において36基を越える古墳時代後期の横穴が確認されている。佐伯市・弥生町には古墳・横穴墓はこのほかには確認されておらず、大分県下においてもその密度が極めて希薄な一地域として認識せざるをえない。この傾向は白杵市より南側の海岸部およびその内陸部の特性であり、墳墓の密度およびその立地を含めて今後の検討課題になる様相をもつ。また集落遺跡としては佐伯市汐月遺跡において古墳時代後期の集落跡が確認できるのみであり、古墳時代を含めてそれ以降の集落跡の所在は今後の発掘調査に委ねられる状況にある。

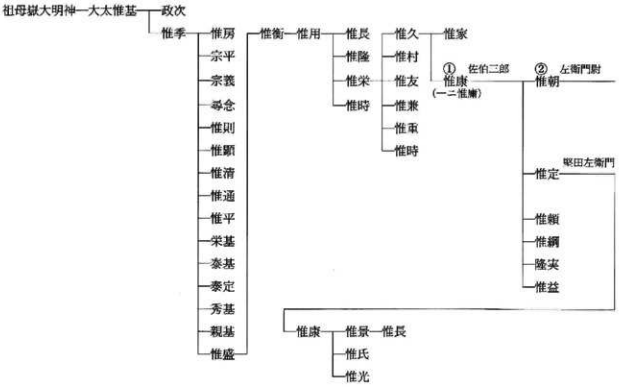
奈良時代以降においても当地域の埋蔵文化財から集落跡・墓地を把握するには、未だ調査の手が不十分であるが、石造物など地表に表徴される遺物から中世期には繁栄の足跡が辿れる。特に平安時代から鎌倉時代にかけての蔵骨器の出土は県下の総数の半数をこえ、中津・宇佐地域とともに出土量の集中する地域である。佐伯市白潟

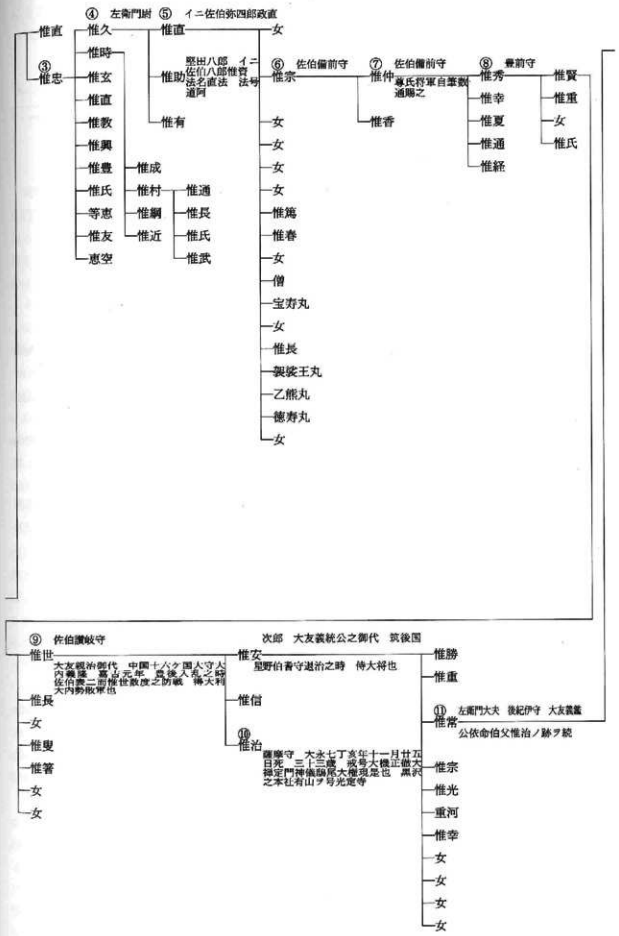
遺跡では4例の蔵骨器が出土しており、これらは奈良時代末～平安時代中期に位置付けられている。また佐伯市上岡字八戸所在の十三重の塔直下から素文鏡を蓋とした陶製四耳壺をはじめ、周辺部も含め総計11例の蔵骨器が発見されており、これらは平安時代末～鎌倉時代に属するものとされている。また、弥生町上小倉には磨崖石塔群が約40基確認されており、嘉暦元年（1326）から康永4年（1345）に至る記年銘が確認でき、南北朝期～室町期の石塔群であることがわかる。これらの磨崖石塔群のうち嘉暦元年（1326）銘の宝塔にはその造立者として「大神惟武」という名前がみられ、また、康永4年（1345）銘の宝塔にも「惟覚」という名前がみられる。大神惟武は大神姓系図によれば大神系佐伯一族にその名がみられ、惟覚に関しても「惟」の一字を継承している点から佐伯氏に属するものと考えられ、当地域が中世県南部において覇を唱えた佐伯氏の一大拠点として認識できよう。佐伯市と弥生町にまたがる番匠川北岸には大分県南部における代表的な中世城郭として名高い栂牟礼城がみられるが、その周辺部には中世期の遺跡が群在する。栂牟礼城の東西の麓に位置する上小倉磨崖石塔群・八戸所在十三重の塔などの石造物もその一例に数えられようが、栂牟礼城の東側に対峙する鶴岡脇の山上には一上寺・二上寺・三上寺の各寺跡がみられる。各寺跡とも明確な寺院跡の遺構を現地表に留めないが、尾根部に平坦地が認められる。特に、三上寺跡には僧春好の御霊屋と伝えられる石造物の内部には7枚の銅鏡と797枚にもおよぶ銅銭が納められていたが、これらの中世期の遺物は周辺地域から集めて納められていることから同時期の遺跡の存在の裏付けとなろう。また、栂牟礼城周辺部の丘陵地帯には宇山城・高城・八幡山城・中山砦（以上佐伯市）、小田山城・平城・竹田城（以上弥生町）など中世期の山城が散在してみられる。

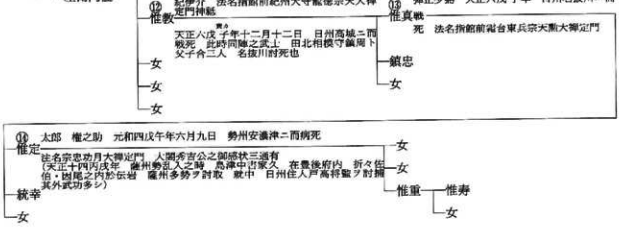
栂牟礼城を拠点とした佐伯氏が没落して以降、慶長6年(1601)、佐伯藩祖毛利高政が佐伯荘2万石に封ぜられ、入部したことにより近世佐伯の歴史がはじまる。毛利氏は栂牟礼城の東に位置し、番匠川・木立川の河口部を見下ろす丘陵上に鶴屋城を築き、その東側の海浜地帯を埋め立てて城下町とした。この佐伯城下町は現在の市街地に発展し、毛利氏入部が現佐伯市の礎となっている。（原田昭一）

4　文献に見える佐伯氏の動向

大神姓佐伯氏略系




④ 左衛門尉 ⑤ イニ佐伯弥四郎政直
惟直
③ 惟忠
惟久
惟時
惟玄
惟直
惟教
惟興
惟豊
惟氏
等恵
惟友
恵空
惟成
惟村
惟綱
惟近
惟通
惟長
惟氏
惟武
惟直
惟助
惟有
⑥ 佐伯備前守
惟宗
⑦ 佐伯備前守
惟仲
惟香
⑧ 豊前守
惟秀
惟幸
惟夏
惟通
惟経
惟賢
惟重
女
⑨ 佐伯讃岐守
惟世
大友親治御代 中国十八ヶ国大守大内義隆一家ト云ヘ共 奥州人ヒ之綸佐伯豊二形惟世数度之防戦 稀大将大内勢敗軍也
惟長
女
惟叟
惟箸
女
女
惟安
惟信
⑩ 惟治
惟勝
惟重
⑪ 左衛門大夫 後紀伊守 大友義鑑
惟常
公依命伯父惟治ノ跡ヲ続
惟宗
惟光
重河
惟幸
女
女
女
女



栂牟礼城は大永年間(1521～1528)に佐伯惟治によって築城されたといわれ、慶長6年(1601)に毛利高政が入部し鶴屋城を築造するまで佐伯氏五代にわたり代々受け継がれた山城である。それゆえ佐伯氏の象徴であるとともに、中世、佐伯地域の象徴ともなりうえる。それでは中世期、佐伯の地において覇を唱えた佐伯氏がどのように出現し、またこの地において確固たる地位を築きあげてきたか、その足跡を追いたい。

佐伯氏は「大神姓佐伯氏系図」・「大神系図」とも祖母嫩大神神を祖とする豊後大神氏の一族であり、その初代を惟康と記されている。惟康以後、「大神姓佐伯氏系図」では惟定が佐伯の地を離れ、伊勢に赴き藤堂家に仕えるまで14代にわたる佐伯一族の動向を記している。

中世期、佐伯地方における佐伯氏の存在を裏付けるものに、弘安8年（1285)、幕府に豊後国の水田面積・管理者などを報告した「豊後国図田帳」・「豊後国田代注進状案」と呼ばれる大田文の記載があげられるが、海部郡831町のうち佐伯荘は180町を占め、注進状案によれば次のように内容を明示している。

佐伯荘180町　領家毛利判官代・同弥三郎殿
　本荘120町　地頭御家人佐伯弥四郎政直法名道精
　堅田村60町内　15町　領家
　　30町　佐伯八郎惟資法名道法
　　7町1反　堅田左衛門三郎惟光
　　7町1反　忠左衛門次郎惟永後家
　　4反　小田原次郎重直法名道仏

これにみえる「地頭御家人佐伯弥四郎政直法名道精」について、「大神姓佐伯氏系図」には五代惟直に関する注記に「イニ佐伯弥四郎政直」と記され、その弟、惟助に関しても「堅田八郎、イニ佐伯八郎惟資、法名直法、法号道阿」と記されている。また、佐伯庶子家にも「惟光」・「惟永」に想定できる人物がみられる。これによれば、当時、佐伯惣領家である五代惟直が佐伯荘本荘120町と堅田村15町、併せて132町を領有しているのに対し、弟の惟資、庶子家の惟光・惟永が堅田村を分領していたことがわかる。

鎌倉時代、佐伯惣領家が本荘を中心に領有していたことがわかるが、その居館を中心とした本拠地は文献史上には現れない。しかし、鎌倉時代、当地域においては石造十三重の塔と磨崖石塔群の刮目すべき2例の石造物がみられる。まず、佐伯市上岡字八戸所在の十三重の塔直下から素文鏡を蓋とした陶製四耳壺をはじめ、周辺部も含め総計11例の蔵骨器が発見されており、これらは平安時代末～鎌倉時代に属するものとされている。これらの蔵骨器は佐伯氏に関係するものと考えられ、その墓標としての石造十三重の塔も県下においては比類のない壮麗なものである。また、弥生町上小倉には磨崖石塔群が約40基確認されており、嘉暦元年(1326)から康永4年(1345)

に至る記年銘が確認でき、南北朝～室町期の石塔群であることがわかる。これらの磨崖石塔群のうち嘉暦元年（1326）銘と康永４年（1345）銘をもつ磨崖宝塔には以下のような銘文がみられる。

右志趣者依相当先□覚惟聖霊一百ケ日忌辰造立之然
則実報同居妙土西方九品□□品顕此宝塔□乃至法界
平等利益而已
嘉暦元年三月十六日造立大願主大神惟武　敬白

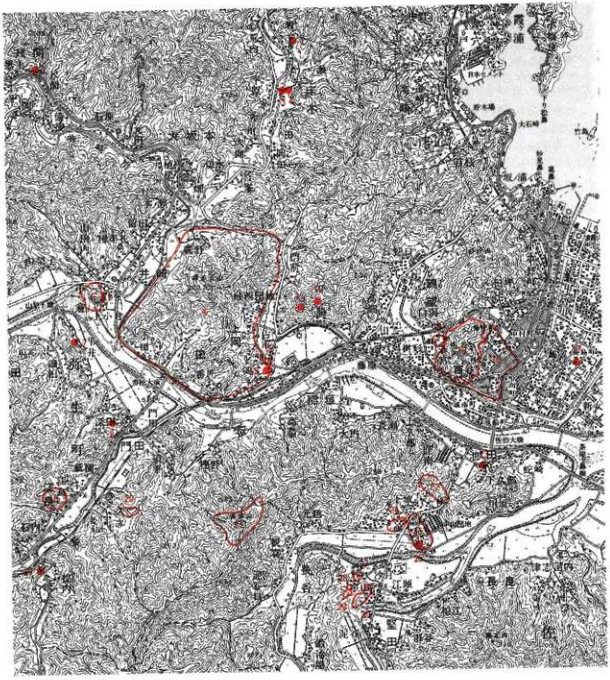
右意趣者為沙弥惟覚夫婦□人逆善所奉起立□然則現世
安穏後生善処乃至法界問利而已
康永四年乙酉二月廿四日供養　願主惟覚　敬白

嘉暦元年銘をもつ磨崖宝塔の銘文にみられる「大神惟武」は「大神姓佐伯氏系図」によれば三代惟忠－惟時－惟村－惟武と続く庶子家の一人であることがわかる。「惟覚」に関しても系図その他の文献上には現れない人物であるが、一群の磨崖石塔にみられる名前であるため、大神惟武同様、庶子家の出自であると思われる。それゆえ番匠川中流域の野津・三重・宇目に通じる要衝の地である小倉地区を押さえるために佐伯氏の庶子家を配したものとも考えられる。

「大神姓佐伯氏系図」によると、注進状案の政直（５代佐伯惟直）の子が６代惟宗、その子が７代惟仲である。元弘３年(1333)、後醍醐天皇に応じた足利尊氏の挙兵に際して、佐伯氏は大友貞宗に従い、鎮西探題北条英時を襲撃している。建武３年（1336）には官軍に敗れ、九州に落ちた足利尊氏が九州の多くの御家人・土豪を味方につけ、東上の機会をうかがっていたが、「大友興廃記」には反尊氏派である肝付八郎兼重を討伐するための軍勢催促状を７代惟仲に想定される佐伯備前権守が受けていることがわかる。また、同様の軍勢催促状が佐伯山城権守に宛てられており、山城権守が佐伯氏のなかでどの人物に比定できるか明らかではないが、これらから鎌倉幕府滅亡後、足利尊氏が九州に落ち、再び東上する建武年間の激動期には佐伯氏が北朝方に接近していたことがわかる。しかし、貞和２年（正平元年・1346）５月17日、尊氏から佐伯荘地頭職が角違一揆に与えられており、それは佐伯荘における佐伯氏の権利の剝奪そのものを意味し、北朝方と佐伯氏との関係の疎遠化が窺える。

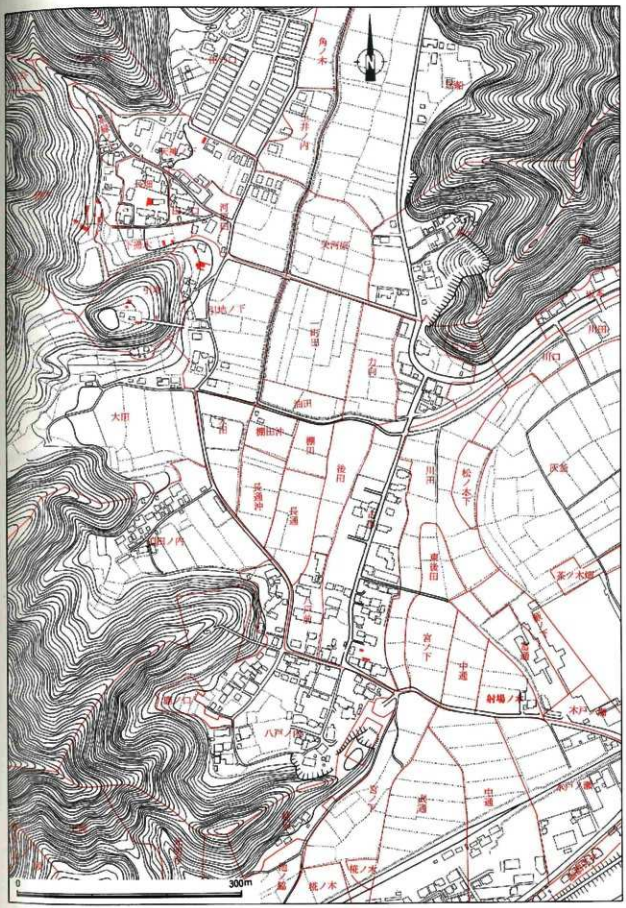
室町期に至ると、嘉吉元年（1441）に大内氏により佐伯地方が侵攻をうけ、堅田・宮野内・代後浦などにおいて合戦が行われたが、９代佐伯讃岐守惟世率いる軍勢により撃退されたことが「大友興廃記」に記されている。惟世の子、10代惟治に関してはその真偽の程は明らかでないものの、「栂牟礼実録」をはじめとした多くの史書に表されている。栂牟礼城は惟治の治世に初めて史書にあらわれ、大永年間（1521～1528）に築造された可能性が高いことが窺える。大永７年には惟治謀反の疑いにより、大友義鑑の命を受けた臼杵長景率いる２万余の兵により攻められたが、栂牟礼城において籠城戦を試み、城本体の落城はみなかったとされている。臼杵長景は策略を巡らし、日向に落ち延びさせ、日向の尾高千山において長景に通じた土民の襲撃を受け、惟治は無念の最期を遂げている。惟治の子、千代鶴も自害して果てたため、大友義鑑は惟治の甥にあたる惟常に佐伯氏の家督を継がせている。12代惟教は弘治３年(1557)、大友義鎮に恨みを抱き、一族を率い、伊予国に退住していたが、後に旧領に戻り、天正６年（1578）に大友・島津の対戦である高城・耳川合戦においてその子惟真・鎮忠とともに戦死している。島津軍の攻勢は翌年にもおよび、家督をついだ14代惟定は島津軍の勧降使を斬り、これに対応して島津軍は二千余兵で堅田地区に侵攻し、堅田地区において佐伯軍と島津軍との壮絶な合戦が行われたとされている。栂牟礼城が史書に登場する２例目であるが、栂牟礼城本体における戦闘の状況その他は一切明らかではない。

文禄２年（1593）には主家である大友氏の豊後除国により、惟定は藤堂高虎に仕え伊勢に移り住み、明治時代に至るまでその家臣として続いており、佐伯の地において中世期を通し覇を唱え続け、14代続いた佐伯氏の足跡は惟定を最後に佐伯の地から永久に消え去ることとなっている。　（山田健一・原田昭一）



1	観音堂の宝篋印塔群	2	河野家宝塔	3	一瀬家板碑	4	一瀬家重制石幢
5	上小倉横穴群	6	磨崖石塔（小倉）	7	宝塔（宮脇）	8	五十川家五輪塔
9	栂牟礼城跡	10	三上寺跡	11	二上寺跡	12	古市遺跡
13	十三重塔	14	白潟遺跡	15	鵜屋城跡	16	佐伯城下町
17	宝剣山古墳	18	竹田城跡	19	宝篋印塔	20	平城跡
21	高城跡	22	中山砦	23	岡ノ谷古墳	24	下城遺跡
25	岩清水古墳	26	八幡山城跡	27	長良貝塚	28	上の台遺跡
29	汐月遺跡	30	宇山城跡				

第１図　栂牟礼城跡周辺遺跡分布地図（国土地理院「佐伯」50,000分の１使用）



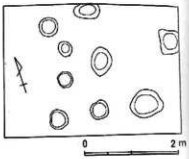
第２図　佐伯市上岡・稲垣・鶴望地区小字配置およびトレンチ位置図

第２章　発掘調査の成果

１　長畑地区の調査

長畑地区は、引地（愛宕神社境内）の屏館推定地の北で、掃木地区の東に位置する低地上に位置する。地理学上、扇状地に分類されるゆるい傾斜面上に占地する。細い水流が、引地の平坦地の崖と長畑との境界付近に流れ下っている。一帯は、民家が立ち並んでおり、微地形や地割を詳びらかにするのは困難な状況である。標高は約11mのところにある（第２図）。

長畑地区においては平成元・２年度に調査を行った。２年度の調査区は元年度調査区を拡張することにより、遺構の実態を把握しようと試みた。



第３図　長畑地区平成元年度トレンチ遺構配置図

《平成元年度調査》

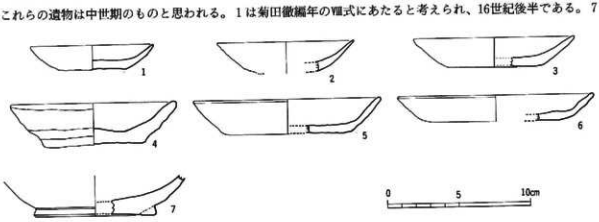
トレンチは、民家に囲まれた畑に位置している。その目的は、中世の遺構や遺物等の広がりを調べる為である。トレンチ面積は18m²である。約30cmほどの表土を剝ぐと、黄褐色の基盤層に由来する層が観察される。この層には拳大の礫を多く含んでいる他、黒色土系の土も若干観察された。こうしたことから、整地層であることが判る。整地層の下位には、旧表土（風化土）が約40cm程度堆積し、更に下位にはローム質状の自然層が堆積する。

遺構は整地層の最上面から掘り込んでいる。発掘面積が広くないので、柱穴状の穴が建物として並ぶかどうかは判らない(第３図)。穴の規模は、直径が35～60cm程度の例が多く、深さは50cmぐらいとなっている。こうした柱穴状の穴の規模は、引地下・掃木地区の例と比較してみると、長畑地区の例はより大きいことが判る。遺物は、底部糸切り離しの杯類が表土層の最下部と柱穴状の穴の中から多量に見つかった。（綿貫俊一）

トレンチから土師質の皿・杯・瓦質土器が出土している（第４図）。

１～３はＳＰ４からの出土である。１は口径8.6cm、器高1.7cm弱。平底より外反しながら立ち上がり直線的に口縁にいたる。底部糸切りである。２は口径9.6cm。底部丸底と思われ、底部より外反して立ち上がる。体部でやや内湾し、口縁端部で再び外反する。３は口径11.4cm、器高2.1cm弱。底部より外反しながら立ち上がり、そのまま口縁へとつながる。４はＳＰ５からの出土である。口径11.6cm、器高2.9cm。底部から口縁部まで同じ壁厚のもので、底部より外反して立ち上がる。底部糸切りである。５・６はＳＰ６からの出土である。５は口径13.1cm、器高2.4cm。底部より外反して立ち上がり、体部は比較的シャープで直線的に口縁につづく。６は口径13.7cm、器高1.8cm。底部より内湾ぎみに立ち上がり、口縁部にいたってやや外反する。７はＳＰ９からの出土で瓦質土器である。底径8.2cm。内面は黒色研磨がほどこされている。高台は貼り付けである。

これらの遺物は中世期のものと思われる。１は菊田徹編年のⅦ式にあたると考えられ、16世紀後半である。７



第４図　長畑地区平成元年度トレンチ出土遺物

は古手の様相を呈するが、高台の形状の類例は他に求められない。

（〆野勝教）

《平成２年度調査》

長畑地区平成２年度トレンチでは、近年宅地造成、畑の耕作等による攪乱を受けていたにもかかわらず遺構の残りは良く、土坑と柱穴が確認され共に多量の土師質土器が出土した。

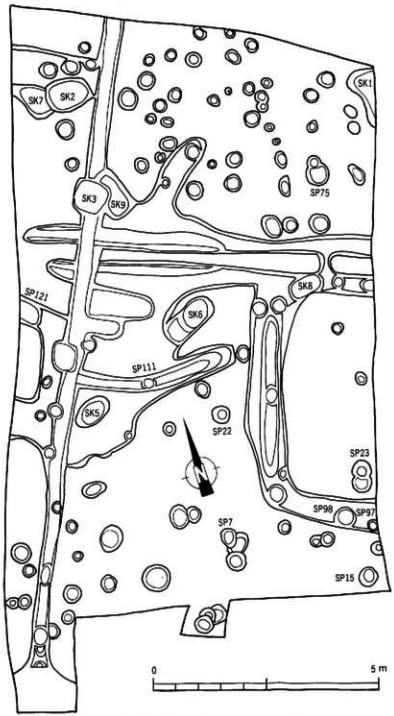
土坑に関しては、ＳＫ１～３、５～９の計８基確認された。すべて方形又は長方形を呈しＳＫ２とＳＫ７、ＳＫ３とＳＫ９で切り合いが確認された。その他、全ての土坑で多量の土師質土器の廃棄する状況が見られた。柱穴に関しては、大きさ14～70cm、土坑と同じく全ての柱穴で土師質土器の廃棄が見られ、多いもので10個体を越す土師質土器を出土した柱穴も存在する。またこれらの柱穴による掘立柱建物の復元は現時点では困難である。

遺物は多量の土師質土器と青磁片、白磁片が出土した。輸入陶磁器類に関しては、１は龍泉窯系青磁碗で内面見込み部に花文のスタンプが施され、暗緑色の釉がかかる。２は白磁皿で２点出土し、口縁は底部から直線的に開き、釉は乳白色で内外面共に中位まで施釉されている。

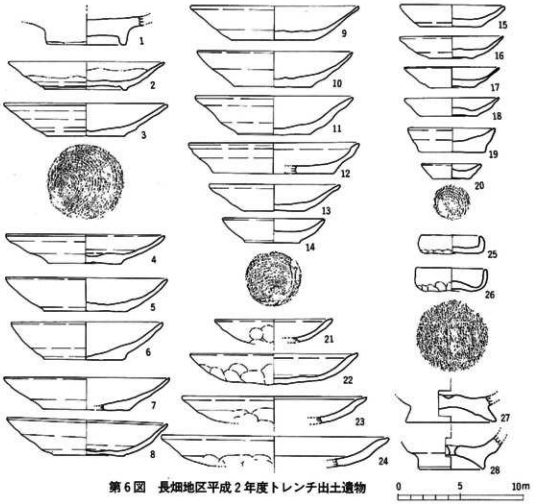
土師質土器は杯（３～13、22～24）、皿は法量によってⅢＡ（14～19・21）、ⅢＢ（20・25・26）、脚付皿（27・28）が出土している。糸切り底の杯（３～13）は、全体に体部が直線的に逆「ハ」の字に外に開く特徴を持つが、中には体部にやや丸みを持つもの（５・７・８・10）、器高に対し底径の広いもの（12）、内面に木口状工具による整形痕を残すもの（10）も存在する。ⅢＡ、ⅢＢ（14～20）に関しても同様に口縁が逆「ハ」の字状に開くのを特徴とし、器高に対し底径が広いもの（19）もある。ⅢＢは（20）の他に口縁部が湾曲したものも存在する。手捏ね丸底（21～26）のものは、口縁部下をナデにより凹状部をつくる杯（23・24）とナデのみの杯、ⅢＡ（21・22）とⅢＢ（25・26）が存在する。脚付皿（27・28）は中心に穿孔が施された（28）と中央に凹部を持つ（29）が存在する。出土遺物は全て柱穴、土坑に廃棄された状態で出土したもので、土師質土器の底部糸切り杯、ⅢＡ、ⅢＢが遺物の主体を占め、続いて手捏ねのもの、輸入陶磁器の順である。

以上出土遺物については15世紀後半～16世紀に位置づけられる。

（河野史郎）



第５図　長畑地区平成２年度トレンチ遺構配置図



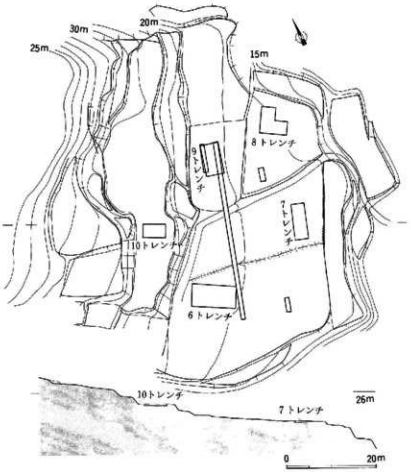
第６図　長畑地区平成２年度トレンチ出土遺物

No.	遺構		器種	法量(cm) 口径	器高	底径	備考
1	SP	124	碗			6.2	見込み部分に花文のスタンプ
2	SK	6	皿	12.6	2.3	6.8	内外共に中位まで施釉される
3	SP	22	坏	13.3	2.7	6.3	底部糸切り
4	SP	22	坏	13.2	2.4	6.1	底部糸切り
5	SP	22	坏	13.2	2.2	6.9	底部糸切り，やや丸みをもつ
6	SP	98	坏	12.2	3.1	6.6	底部糸切り
7	SP	98	坏	13.4	2.6	7.0	底部糸切り，やや丸みをもつ
8	SP	111	坏	13.0	2.7	5.7	底部糸切り，やや丸みをもつ
9	SP	111	坏	13.6	2.7	6.5	底部糸切り
10	SP	15	坏	12.6	2.9	6.4	〃　見込みヘラ状工具整形痕
11	SK	6	坏	12.8	3.1	5.8	底部糸切り
12	SP	23	坏	13.6	2.5	9.8	〃　底径に比し器高が低い
13	SP	22	坏（小）	(10.8)	2.1	4.8	〃　坏と小皿の中間の大きさ
14	SK	6	小皿	8.2	1.9	4.6	底部糸切り
15	SK	6	小皿	8.4	1.8	4.9	底部糸切り
16	SP	98	小皿	8.2	1.8	3.4	底部糸切り
17	SP	22	小皿	7.8	1.6	3.6	底部糸切り
18	SP	97	小皿	7.6	1.5	4.4	底部糸切り
19	SK	7	小皿	7.0	2.0	5.4	底部糸切り，底径大
20	SK	6	特小皿	5.0	1.2	3.0	〃　図の他に口縁部湾曲有り
21	SK	8	小皿	9.6	(2.0)		手捏土器，口縁下ナデのみ
22	SK	8	坏	(13.6)	2.5		手捏土器，口縁下ナデのみ
23	SP	7	坏	(15.0)	(2.2)		手捏土器，口縁下ナデによる凹
24	SP	7	坏	(18.5)	(2.5)		手捏土器，口縁下ナデによる凹
25	SK	6	特小皿	4.8	1.5		手捏土器
26	SP	75	特小皿	5.6	1.9		手捏土器
27	SK	2	脚付皿			5.2	穿孔をもつ
28	SK	2	脚付皿			7.2	凹部をもつ

第１表　長畑地区平成２年度トレンチ出土遺物観察表

2　掃木地区の調査

掃木地区は、愛宕神社が座する境内を中心位置に仮定すると北西の山裾に延びている。その景観は、山裾と低地の間を帯状に広がる河岸段丘状の小高い平低な台地である。低地との比高は約５ｍである。明治22年以前にこの台地の一部が掘削されて溜池が造られた。この際、仏像とマリア像の二体が見つかっている。このあたりに住む人々は「掃木」が「はわきのかみ（深田伯耆守のことか？）」の屋敷の跡であると言い伝えている。掃木地区は1988年の調査で土坑（ＳＫ２）内から多量の土師質土器が出土した古市Ｉ区と同じ地点である。



第７図　掃木地区トレンチ配置図

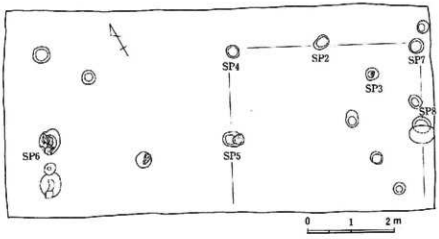
〈６トレンチ〉

６トレンチは柱穴状の穴が17ヶ所確認された（第８図）。直径は25～30cm前後で深さは約40cm程度の例が多かった。６トレンチは建物が構成されるかどうかを確認する為に、50m²の面積を発掘対象面積とした。しかしＳＰ２・４・５・７・８から構成される柱穴状の穴が建物跡の可能性を残している他は、はっきりしなかった。多くの柱穴状遺構からは土師質土器の小破片が見つかった他、ＳＰ３から龍泉窯系の中国製の磁器が見つかっただけである。これらの柱穴状遺構の中の土は、近・現代の陶磁器・骨が出土した穴内の土とは、しまり具合・色調の点で区別することができる。したがって、これらの遺構が江戸時代以前に形成されたことが判る。

〈７トレンチ〉

７トレンチは、台地の縁近くに設けた。トレンチの調査面積は24m²とした（第７図）。

厚さ約15cmの表土を除去すると、２層がほぼ全面に現れる。この２層は赤土で硬くしまっていた。当初この２層が、６トレンチでも見られた地山の遺構検出面と考えていた。ところが大きめの石が若干出土しただけで、柱状の穴の痕跡さえなかった。この為若干暗い色調変化が観察されたト



第８図　掃木地区６トレンチ遺構配置図

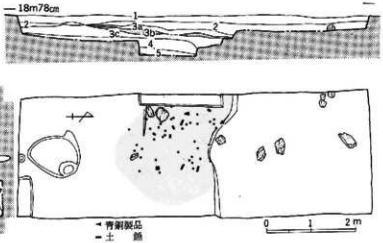
レンチの南壁に沿って深掘したところ、2層のより下層に更に数枚の層が観察された。

地層断面を観察すると、2～3b層までは整地層であることが判った。それぞれ黒色土や赤色土の混在の違いに区分できた。3c層は黒色土で旧表土（風化土）と考えられ地山に由来する小さな石粒が微量観察された。4層は茶褐色土。5層は赤土ローム層（火山灰）であった。

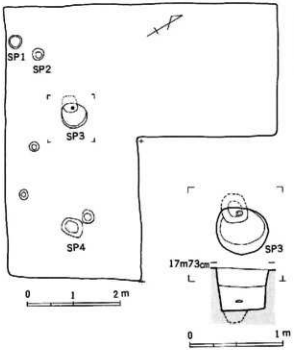
建物は3b層からまとまって見つかった。3b層は、整地の際の廃棄に由来しているが灰・土師質土器のかけらなどの廃棄物等から構成されていた。その分布はさほど広くなく、楕円形に広がっていることから一括して廃棄されたことが判る。少量ながら、青銅製品・土錘・鉄器なども見つかったが、近世から現代に至る陶磁器片等の遺物は一例も見つかっていない。こうしたことから3b層は近世以前に形成されたことが判る。

遺構は柱穴状の穴と、楕円形の土坑が見つかっている。掘り込み面は3c層上面にあることが断面に観察された。このことから、3b層の形成とほぼ同様の頃に掘られたと思われる。最終的な整地層である2層の上面には今のところ観察されていない。

今後、3b層の形成と、3c層上面の遺構が他のトレンチとどのように関連するか、また前後関係の有無を調べる必要がある。



第9図　掃木地区7トレンチ遺構配置図



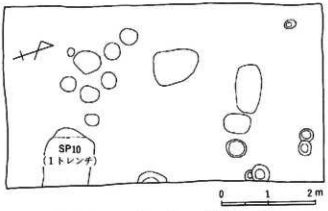
第10図　掃木地区8トレンチ遺構配置図および拡大図

《8トレンチ》

掃木8トレンチは北部の崖際に位置している。柿の木との関係からへんそくできな「L」字状となり、発掘面積は12㎡とした（第10図）。

柱穴状の穴が6ヶ所、土坑1ヶ所が見つかった。このうちSP1～4は、他のトレンチで見つかった遺構内部の土とほぼ同じ色調・土質である。その中でSP3が若干硬さに違いがあった。SP3を注意深く掘り下げてみると、ほぼ－45cm程度で床に達し、ここから再びオーバーハングする状況で深さ約15cmの小穴が形成されていた。

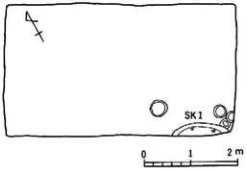
内部の土を観察すると、検出面から－20cmま



第11図　掃木地区9トレンチ遺構配置図

での土はしまってはいるもののぱらつく感じがするのに対し、－20cmより下の土は若干粘質で多量の焼土・炭が見つかった。こうしたことからＳＰ３内部の土は、上部が整地の際の埋土、下部が灰・焼土・炭を廃棄（土坑の壁が焼けていないことと、破損した土師質土器が見つかったことによる。）した結果に由来しよう。

遺物は、糸切り離しの底部をもつ土師質土器の小破片が見つかっている。その他、近世・近代の陶磁器類などの破片は全く見つからなかった。したがって、掃木８トレンチの遺構、遺物もまた近世以前に由来が考えられる。



第12図　掃木地区10トレンチ遺構配置図

《９トレンチ》

９トレンチは６トレンチとともに、崖際に設けたトレンチである。そして、1988年に発掘した１トレンチの北端部と３トレンチを包括させた。これは１トレンチで土師質土器が多数見つかったＳＰ１・２・10（1988年に見つかった遺構）などと同様に穴から土師質土器を多数含んだ穴が新たに見つかった。位置はＳＰ10の北側に隣接していた。このように、埋納あるいはそれに近い状況で土師質土器が狭い範囲内で見つかるということは、このあたりが特定の機能を有した場所と考えられよう。

出土遺物は全て土師質土器で、底部を糸で切り離した例である。こうした土師質土器が見つかった穴から近世・近代の陶磁器など新しい遺物は全く見つかっていない。

近世以前に掘削された大小の穴は建物跡として再構成することができなかった。

以上、掃木１トレンチから９トレンチまでは、東方の低地ら栂牟礼山系側にかけて大小５段ある掃木地区の平地のうち、下から２段目の平地に位置している。

《10トレンチ》

10トレンチは、１トレンチから９トレンチまでを設けた平坦地より２段上位の平坦面に設けた。しかも、崖際の上位に位置させた。その目的は、この平坦面に遺構が観察されるかどうかと言うことと、平坦面の形成時期を詳らかにする為であった。発掘面積は15㎡とした。

10cm程度の厚さを有する表土を除去すると、遺構検出面である地盤層になる。地盤は硬くしまっており、平坦に削平されていた。柱穴状の穴が４基、土坑１基（ＳＫ１）を検出した。これらの穴はトレンチの中でも最も崖際に位置している。

土坑は直径約130cm前後で、深さ約20cmの規模を有している。内部には多量の炭と黒色系の土が混在した状況でつまっていた。更に内部の土は硬くしまっていた。

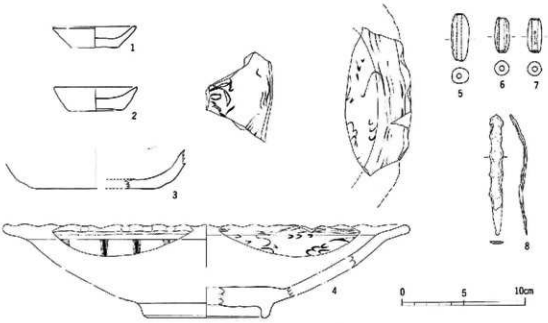
柱穴状の小穴と土坑から見つかった遺物の多くは土師質土器の小破片が見つかっただけである。特に土坑から見つかった土師質土器は、底部には明瞭に糸切り離し痕跡が観察され、しかも器形などから中世に溯ることは明らかである。（綿　貫）

《掃木地区出土遺物》

１・２とも土師質土器の小皿である。３は杯である。１は６トレンチＳＰ５からの出土で、口径6.8cm、器高1.7cmをはかる。平底から外反し、少し尖り気味の口縁部にいたる。底部糸切りである。２は８トレンチＳＰ５の出土で、口径6.8cm、器高1.9cmをはかる。平底から外反し、二等辺三角形を呈する口縁部に至る。底部糸切りである。３は杯で、底部より外反しながら立ち上がる。これらの土師質土器は、白杵石仏群地城遺跡に類例が求められ[1]、15世紀から16世紀にかけてのものと思われる。また1988年に行った試掘時にも出土している[2]。（〆　野）

青磁・掃木地区６トレンチ（第13図４）

口径32cmを測る。内湾気味に立ち上がる胴部が外方に屈折し口縁にいたる例で、口縁は波状を呈する。外面体部にも縦縞状文が入り、内面はヘラによる文様を施す。釉は淡緑色で光沢があり、厚く施釉される[3]。類例は伐株山城跡で見つかっている。



第13図　掃木地区出土遺物

土錘・掃木地区７トレンチ（第13図５・６・７）

管状土錘で、５は全長3.8cm余、中央部直径2.4cm、内孔径0.4cm、重さ6.9gで、６は全長2.85cm、中央部直径1.2cm内孔径0.4cm、重さ3.8g、７は全長2.8cm、中央部直径1.15cm、内孔径0.5cm重さ3.6gである。色調はいずれも赤褐色。

青銅製品・掃木地区７トレンチ（第13図８）

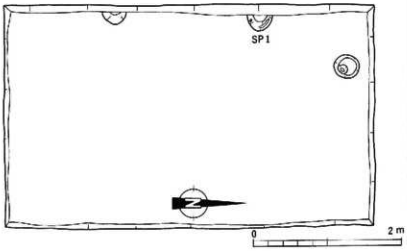
長さ9.7cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、3.7gである。先端部は尖っているが、頭部は剣頭形をしている。頭部付全長の３分の２までは、指状の打ち敲き痕跡が５ヶ所残る。かんざしの可能性がある。　（綿　貫）

(1)　菊田　徹　『白杵石仏群地域遺跡調査報告書』　白杵市教育委員会　1983
菊田　徹　「東九州における中世土師質土器の様相－杯・皿形土器を中心として－」（『専修考古学』第３号　1986）
(2)　佐伯市教育委員会　『樫半礼城址と関連遺跡発掘調査概報Ⅰ』　1988
(2)　内恵克彦・後藤一重　「伐株山城跡における表面採集の遺物について」（『玖珠郡史談』第18号　1987）

3　下掃木地区の調査

下掃木地区は昨年度調査を行った愛宕神社の南東に位置し、比高差が約37m程ある。この地区では２本のトレンチを設定し、西側の第１トレンチにおいてのみ遺構を確認した。第１トレンチは３×５ｍの設定で、現耕作土下約20cm程の遺構検出面よりピット３基を検出し、この内ＳＰ１からのみ遺物を検出した。第14図は備前系擂鉢の口縁部である。時期は16世紀頃であろう。　（新宅信久）

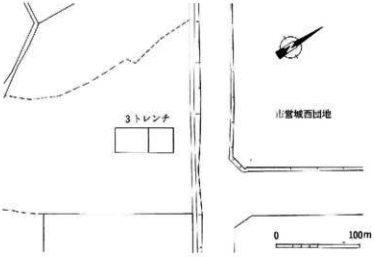
第14図　SP1出土遺物



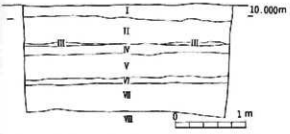
第15図　下掃木地区１トレンチ遺構配置図

4　天神ノ下地区の調査

天神ノ下地区は栂牟礼山より張り出した「天神ノ尾」と呼ばれる尾根裾の入口部にあたる。この地区では3×3mのトレンチを設置した。この場所は昭和初期までかなりの深田であったらしく、この地区に隣接する市営団地造成の際、埋め立てを行っている。約1.5m程掘り下げを行った結果、旧水田層（Ⅳ、Ⅴ層）中に時期が混在する形で遺物が包含され、Ⅶ層においては中世の土師質土器破片を多く検出した。Ⅷ層に至っては灰色粘質層でかなり厚く、調査期間等も考慮して旧基盤層までは掘り下げを行わなかった。



第16図　天神ノ下地区トレンチ配置図



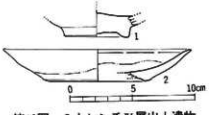
第17図　天神ノ下地区3トレンチ北壁土層図

Ⅰ層	表土（茶褐色軟質土層）	
Ⅱ層	黄褐色硬質土層	整地層
Ⅲ層	淡緑灰色軟質土層	腐葉土層
Ⅳ層	灰色粘質土層	旧水田上層
Ⅴ層	黄灰色粘質土層	旧水田下層
Ⅵ層	黄灰褐色硬質土層	水田基盤層
Ⅶ層	黒灰色軟質土層	
Ⅷ層	灰色粘土層	

第2表　天神ノ下地区3トレンチ
北壁土層観察表

第18図1・2はⅣ層出土遺物である。1は龍泉窯系青磁碗の底部で、淡緑色の釉がかかるが、畳付と高台内には釉がかからない。2は白磁皿で口縁部から内外面の体部中位にまで明白色の釉が施され、畳付は斜めに削り出している。3はⅤ層からの出土で寛永通宝である。Ⅵ、Ⅶ層からも遺物は認められるものの、完形に復元出来る遺物はない。以上、Ⅳ～Ⅵ層までは時期が混在し、1が14世紀、2が15～16世紀である。また、3については背文字が「文」と見受けられ上限年代が17世紀後半代に位置づけられる。

（新　宅）



第18図　3トレンチⅣ層出土遺物

第19図　3トレンチⅤ層出土遺物

5　引地地区の調査

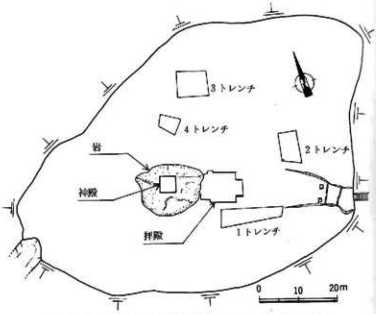
この地区は以前から、中世佐伯総領家居館址と推定されてきた地である。栂牟礼山系から東に延る屋根の先端頂部に位置する。低地からの比高は約31mである。居館址と推定されてきただけあって、頂部は約4700㎡の広さを有する平坦地である。尾根状地形の様子からみて、不自然な平坦地であることは確かで、「引地（曳地）」という小字名はかつて造成されたことを物語っていると思われた。

平坦部のほぼ中央部には、屋根のコア（核）である岩が4mほど屹立しており、その上に神殿が鎮座する。更にその前方（東方）には拝殿がある。この神社は、大永元年に佐伯惟治によって勧請されたと伝えられている。神殿・拝殿・参道の周囲は、樹齢100年以上も経過しているとみられる常緑広葉樹が林立している。

中世に溯る遺品としては、神殿の礎石に用いられた宝塔の笠石、林の中に残る五輪の塔の笠石だけであった。

発掘調査は林立する木立の中をぬうように4ヶ所のトレンチを設けた。このうち1トレンチから神社祭祀に関わる多量の近世・近代陶磁が出土した他、2トレンチで同様の陶磁器が若干見つかった。中世に溯る陶磁器としては、3トレンチで見つかった一例の備前焼小破片の他に見つからなかった。

表土層を除去すると基盤層の場合が多く、こうした平坦地で通常観察されるクロボク・ローム層は観察されなかった。したがって、時期は不明であるが、平坦地は人工的に造成されたと考えられる。ようするに造成・整地された景観が遺構と言えよう。　　（綿　貫）



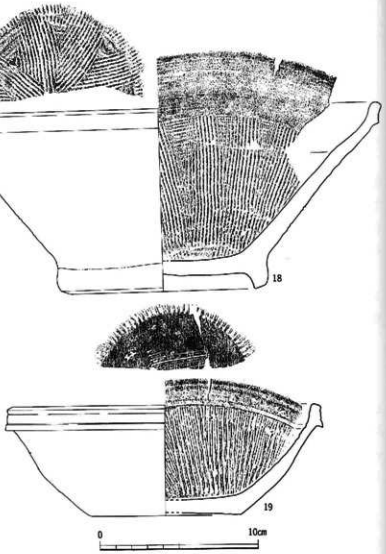
第20図　引地（愛宕神社境内）地区トレンチ配置図

《引地地区出土の近世の陶磁器》

トレンチから出土した遺物には、土製人形・土鍋・鉄製品・陶磁器類がある。時期的には備前焼の甕の胴部片1が中世と考えられるもので、他は江戸時代とその後のものが主体である。陶磁器類の一部を図示しておきたい。

第22図1は陶器の表面に施釉し染付による模様を描いたもの。同様のものが他に1点ある。2は蕪？の絵が3ヶ所ある。コンニャク判は18世紀前半を中心に盛行したものである。13は完形で外面に2点と円文が対になって3ヶ所描かれている。仏飯器は14のほかに1点出土した。11の蓋と対になるものの類例が姫路城侍屋敷[1]から出土している。

15・17と同様のものが4・5個ある[2]。7は高台が高く器体部が直線気味にのびるものでこれらの類例は旧芝離宮庭園（武家屋敷跡）や郵政省飯倉分館構内遺跡[3]（米沢藩・臼杵藩の下屋敷跡）から出土している。広東宛とよばれるもの。8・9は器体



第21図　引地（愛宕神社境内）地区出土擂鉢

下部が丸く口縁部が反返り気味のもので端反碗とよばれるもの。8と11の見込み文様は同様であり同一時期のものであろうか。6は真っ白い器体に明るい青の染め付け文様をもつ。明治以降のものと思われる。5も新しい盃である。盃は10点前後出土している。第21図18・19はいづれも拓影に向かって右から左にカキ目を施している。18は肥前系、19は備前系であろう。時期は不詳だが、多分1～15の陶磁器類と重なるものであろう。

トレンチから出土しためのうち図示しなかった備前焼甕の胴部をのぞいて中世にさかのぼるものは認められない。最も古いもので18世紀の前半までであり、以後断続的に現在まで遺物の堆積が続いているものである。

（高橋信武）

(1) 佐賀県立九州陶磁文化館　『国内出土の肥前陶磁』　1984
(2) 旧芝離宮庭園調査団　『旧芝離宮庭園』　1988
(3) 港区麻布台一丁目遺跡調査会　『郵政省飯倉分館構内遺跡』　1986

第22図　引地（愛宕神社境内）地区出土陶磁器

6　引地下地区の調査

栂牟礼山系から延びる屋根の最先端部が東方の低地に没しようとするところにある。低地との比高差は約6mである。地理学のうえからは通常門前川の河岸段丘と理解される景観を示している。東方の門前川付近からふり返って見ると、愛宕神社（引地）の座する大地の縁に帯状に広がっているのが判る。規模は、最大幅約50m、最大長約100mの広さを有する。

引地下地区の現状での帯状平坦面の利用状況は、北側から老人会の公民館、梨畑、民家となっている。試掘調査は、比較的にまとまった面積を有する公民館と民家の間にある約1720m²ほどの梨園で行った。試掘面積は125m²

No.	細　別	口　径	器高	底径	施文・調整等	産地・年代
1	陶胎染付碗	9.6	5.85	4.1	畳付部は無釉・施釉部は貫入・草花文	肥前・18C後半
2	磁器碗	9.0	4.25	4.2	コンニャク印判のあと墨描き	肥前・18C代
3	磁器碗	4.9～9.7	4.8	3.6	畳付部は無釉・草花文	肥前・18C代
4	青磁碗	11.6			外面は青磁	18C後半
5	磁器碗	11.1～11.4	5.3	4.8	見込みに蛇ノ目釉剥ぎと重ね焼き痕	18C後半
6	染付仏飯器	7.1	6.0	4.5	畳付部は無釉・染付けは茶色	18C後半
7	磁器蓋物蓋	10.6	5.55	4.3	見込み蛇ノ目釉剥ぎ・菊花文	18C中葉～幕末
8	磁器蓋物蓋	9.9	2.6	4.1	見込みに源氏香文	18C後半～19C初
9	磁器蓋物蓋	9.35	3.15	4.1	染付の色は外色藍色、内は見込以外は薄色	
10	陶器碗	8.8	4.8	3.4	高台は削り出し、内外面に貫入一対の若松文	京焼系・18C後半代
11	陶器碗	9.2	5.3	3.1	高台は削り出し・内外面に貫入	信楽系・18C後半～幕末
12	陶器碗	9.0	5.0	3.6	高台は削り出し・灰白色釉の上に部分的に鉄釉	萩焼？　18C末～19C代
13	磁器碗	12.45	6.7	6.0	畳付部は無釉・見込みに寿字銘	18C末～19C初
14	磁器碗	10.8	6.0	4.9	畳付部は無釉	
15	磁器碗	10.4	5.65	4.3		19C初～幕末
16	磁器碗	10.8	5.4	3.4	コバルト顔料・釉色はきわだって白い寿字銘	
17	磁器碗	7.7	3.3	2.9		
18	擂鉢	28.3	11.6	13.4	外面高台より上位に施釉	肥前？
19	擂鉢	19.8	7.0	9.6	底面のみ無釉・口縁付近のカキ目はナデ消し	備前？

第３表　引地地区出土遺物観察表

であっが梨の木を避けた為に不規則な調査区の設定とならざるをえなかった。

表土から約40cmで遺構検出面である赤土粘土層（ローム層）が現れる。この層の上面を丁寧に調べると33ヶ所で柱の穴状の凹んだ場所のあることが判った。穴の大きさは大小様々であったが、そのほとんどは穴の直径が約30cm、穴の深さ約50cmほどの規模を有していた。遺構と考えられたのはこうした穴ばかりで、溝や墓などは観察されなかった。これらの穴からは、中世に属する土師質と中国青磁などの器の小破片が出土した。近代の磁器破片も１例出土したが、土師質の器か出土した穴の埋土の土質とは違っていた。

発掘作業の結果、柱穴状の穴は建物として並ぶ事はなかった。しかし、穴の規模がほぼ同様であるので、人間の手による構造物に関連することは考えられる。

その他、調査区内には旧石器時代に属するＫ jpl（マメンコ）と黒色帯という二つの火山灰が帯状に広がっていることが観察された。これらの層の堆積角推定延長線は遺跡の背後を形成する愛宕神社境内（引地）の岸方向に延びていた。こうしたことから、ここは河岸段丘などではなく、人々の掘削作業に由来する平坦地である。

（綿　貫）

7　古市地区の調査

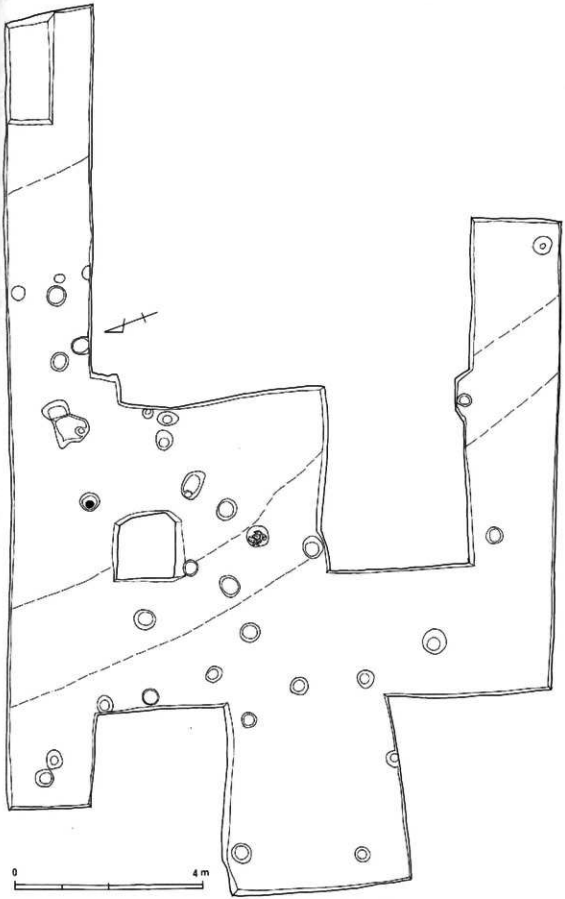
当調査地区では３×４ｍ（１トレンチ）、２×９ｍ（２トレンチ）の２本のトレンチを設定し、いずれのトレンチも中世～近世にかけての遺構を検出した。

〈１トレンチ〉

１トレンチではⅢ層上面において近世のピットを19基検出した。各ピット内にはⅢ層が中世遺物包含層であるために近世遺物片と中世土師質土器片が混入している。Ⅲ層は約30cm程度の厚さがあり中世遺物の大半はこの層より出土している。Ⅳ層上面では中世のピットを17基と土坑１基（ＳＫ１）を検出した。ＳＫ１の覆土は炭化層であるが用途は不明である。ピットについてはトレンチの規模が小さく建物を復元するには至らなかった。

〈遺物〉

近世遺物は破片が多く復元出来るものはなく、 中世遺物はピット内と包含層から出土している。



第23図　引地下地区１トレンチ遺構配置図

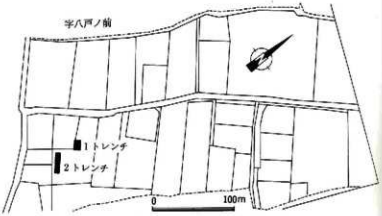
ピット内出土遺物

1～4は土師質土器である。1・3・4は杯で、1・4はやや内湾しながら上に立ち上がる。3は体部が短く、斜上方向へ直線的に立ち上がる。体部下半及び底部が厚い。2は皿Bである。底径が5.3cmで外に逆「ハ」の字状に開く。

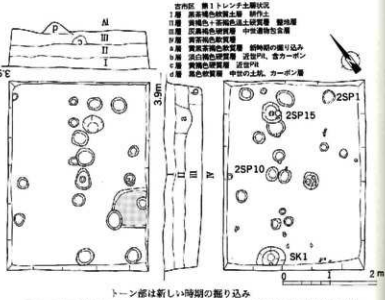
Ⅲ層包含層遺物

5～15までは土師質土器である。5～10・15までは杯で、5・6は器高が4.1cmとやや高く、斜上方向へ直線的に立ち上がり体部及び底部は全体的に厚い。口縁部は断面三角形をなす。9・10は器高が3.3cmと低い。9は底部が厚く口縁部が断面三角形をなし、立ち上がりがやや外に広がる。10はやや内湾しながら立ち上がる。5～10は糸切りである。15は口径が10cm、底径が5.9cm、器壁が0.3cmと薄手でやや斜上方向に立ち上がる。底部はヘラ切りで板状圧痕が認められる。11～14までは皿でAとBに分けられる。11は皿Aで体部が短く、斜上方向に直線的に立ち上がる。断面は三角形を呈する。12～14は皿Bで12は口径と底径が同比率で、体部は短くほぼ垂直気味に立ち上がる。13・14は器高が1.7cm・1.2cmと低く、いずれも内面見込み部に指頭圧による凹部が認められる。口縁部は丸みを帯びる。

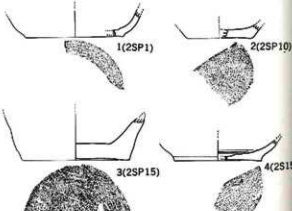
16は瓦質土器で碗の高台部である。調整は全体的に雑なナデを施し、高台は断面方形をなす。17～20までは輸入陶磁器で17・18は同安窯系青磁皿でいずれも淡緑灰色の施釉である。17は体部下半から外反し大きく開き口縁部の断面が三角形をなす。18は斜上方向に立ち上がり断面はやや丸くなる。19・20は龍泉窯系青磁碗である。19は口縁部で外面に蓮弁文の片彫りを施し淡緑色の釉がかかる。20は淡緑色の施釉で高台内と畳付には釉がかからない。21・22は須恵質陶器の甕で外面には格子目文タタキ、内面には同心円文当て具痕の後ナデ消しが施される。22は東播磨系捏鉢の口縁部で外面が屈曲し明瞭な稜を持つ。口縁端部直下に内外面ともに強い回転ナデによる凹線が認められる。23は常滑焼の甕の口縁部で幅2.2cmの縁帯部を持ち、色調は緑褐色を呈する。



第24図　古市地区トレンチ配置図



第25図　古市地区1トレンチ遺構配置図および土層図

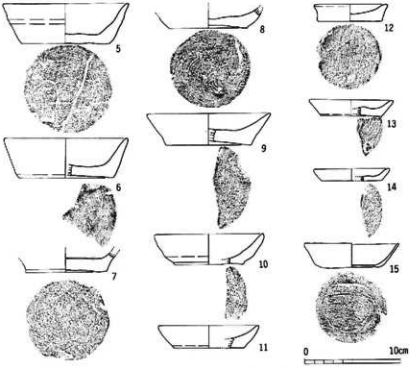


第26図　古市地区1トレンチ中世ピット内出土遺物

24・25は管状土錘で、24は全長4.4cm、最大幅1.7cm、内孔径0.2cm、重さ4g、色調は赤褐色である。25は全長5.2cm、最大幅0.9cm、内孔径0.5cm、重さ4g、色調は淡黒灰色である。26砥石で表裏2面使用で、かなり擦り減っている。27～29までは銅銭である。計3枚出土しており、27は「元豊通宝」で表裏ともに磨滅が著しい。

28は「太平通宝」、29は「天聖元宝」である。3枚とも背文字は見受けられない。

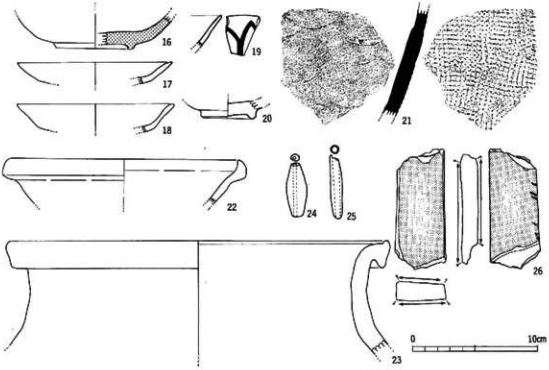
以上、近世に関しては遺物の残りが良くないものの京焼風陶器が出土しており18世紀代に、また、中世については輸入陶磁器や土師質土器等から13世紀後半～14世紀前半前後に位置づけられよう。　　（新　宅）



第27図　古市地区１トレンチⅢ層出土遺物（１）

〈２トレンチ〉

２トレンチでは主に近世の遺構を確認した。ここは庄屋屋敷があったとされ、近世期に２度焼失しているらしく、遺構もこの内いづれかの焼失跡を裏付ける形で検出されている。本来の土層堆積状況は第１トレンチと同じであるが、Ⅱ層（整地層）を切って大きな掘り込み（ＳＫ１）が検出された。上面プランは不定形でありトレンチ内最長軸約６ｍ、最深部約1.4mを測る。ＳＫ１はその土層状況から判断して、焼失後の火災家屋を片付けた一括廃棄であり、その後整地を行っている。また、石包丁も出土しているが古い時期の遺構は検出されなかった。

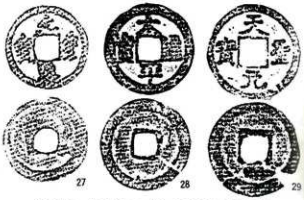


第28図　古市地区１トレンチⅢ層出土遺物（２）

遺　物

1はそば猪口で外面に草花文、内面見込みには鷲が施文される。2は小皿で内面見込みに雲文が施文され、3は皿で裏文様には線書き唐草文、内面には草花文、見込み部には松竹梅が施文される。4は石包丁である。5は備前系摺鉢で内面には櫛歯状工具による14本単位の摺目が見られる。6・7は軒平瓦で、瓦当部分の中心文様は花弁状で左右に唐草文を延ばす。8は軒丸瓦で、瓦当は左回りの巴文で蓮子数は15個である。以上、出土遺物については18世紀代と考えられる。また、瓦については杵築小学校校内遺跡出土瓦に類似しており18世紀代に比定される。

（新　宅）



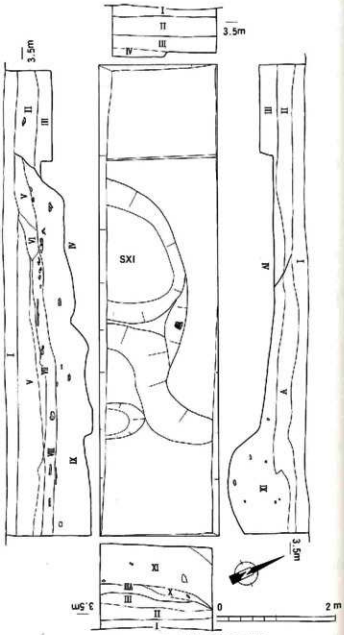
第29図　古市地区１トレンチⅢ層出土銅銭

8　栂牟礼城跡の調査

栂牟礼城は標高223.7mの栂牟礼山山頂部を中心に東西1.5km、南北2.3kmにわたり縄張りが広がる山城である。

その縄張り配置は小野英治氏の精力的な踏査により確認された箇所が大部分であるが[1]、近年の航空写真測量図の作成により縄張りの全貌が把握できた。

その縄張りは、頂上部を利用した主郭を中心に南側に伸びる尾根上を利用して曲輪を造成している。主郭と曲輪２の間には堀切を挟んで武者溜が２段に造成されており、さらに曲輪２との間に堀切がもう１本掘削されている。曲輪２はその面積が1900m²をこえ、栂牟礼城の縄張り中、最も広い面積を有する平坦地であり、中央部には、盛土状の高まりが２カ所みられる。曲輪２の南側には比高差22mの急斜面下に堀切が掘削され、その前面の武者溜を挟んで曲輪３が造成されている。曲輪３はわずか190m²を測るのみであるが、その南側尾根上には堀切が５本掘削されているうえ、東側斜面に８本、また西側斜面に１本の竪堀がそれぞれ掘削されており、狭い空間ではあるが、曲輪３の栂牟礼城攻防における位置付けの重要性がうかがえる。このほかにも曲輪２から小出山城にむかう尾根上には曲輪が数段形成されており、堀切・竪堀が幾重にも掘削されていることや、主郭から北側に２



第30図　古市地区２トレンチ遺構配置図および土層図

第31図　古市地区２トレンチ出土遺物

本のびる尾根上にも数本の堀切が見られ、その縄張り範囲の広さもさることながら体系立った防御施設の配置には目を見張るものがある。

〈主郭の調査〉

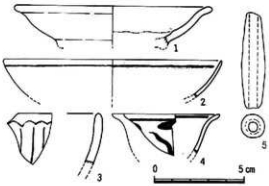
主郭は10×65mを測る栂牟礼山頂上部の平坦地であるが、今回は曲輪２に面する南端地点に縦9.5m、横7m、幅2mのT字状のトレンチを配した（第37図）。ここでは地表面精査の段階から土錘・備前焼大甕片などの遺物が表面採取されており、深さ約10cmで岩盤に至るが、部分的には岩盤が露頭している箇所も認められた。それゆえ出土遺物である備前焼大甕片・白磁片・中国産染付片・青磁片・瓦質土器火鉢片・土錘などは地表面ないしほとんど地表面に近い表土層から検出されており、埋土も岩盤を整地のために削平した際に出た多量の角礫を多く含み、山城築造期の地表面と現地表面はほぼ同じであることがわかる。出土遺物は第32図にあらわした。１は白磁皿である。復元口径11cmを測り、体部はゆるやかに丸く伸び、口縁部は端反りの形態を呈する。白濁した厚めの釉が内面見込み部を除き全面に施されており、釉には細かい貫入がはいる。２は復元口径12cm を測る染付皿であ

る。体部は内湾気味に口縁に至り、内外面口縁付近に界線が1条ずつはいる。3は青磁碗である。体部外面はヘラ描きによる細描蓮弁文であり、蓮弁文は細線と剣頭が蓮弁としての単位を意識して施されている。4は染付小坏であり、復元口径6cmを測る。体部は内湾気味に立ち、口縁部は端反りを呈する。口縁付近の内外面に界線が1条ずつみられ、外面の界線以下に染付の文様が施されている。

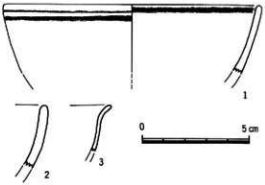
《曲輪2の調査》

曲輪2には合計8カ所のトレンチを配した(第37図)。いずれのトレンチにおいても深さ20cmにおよばず地山あるいは岩盤に至り、いずれのトレンチにおいても明確な遺構の確認は果たし得なかった。特に2×6mの7トレンチを設定した高まりはこれまで村田修三氏によりくい違い虎口とし、土盛による遺構ではないかと想定されていたが[25]、調査の結果、厚さ10～15cmの表土下において地山が確認でき、人工的な盛土ではないことが明らかとなった。ただ曲輪2は全域ほぼ平坦地をなすが、中央部の高まりは異質であり、地山削平により平坦地を造成したもののなぜこのような高まりを残す必要があったかに関しては明確な結論は出し得なかった。なお7トレンチにおいても遺構は検出できず、柱穴間の幅を想定した場合、この高まりには櫓などの掘立柱建造物が存在していた可能性は極めて低いものと思われる。曲輪2の各トレンチからはほとんど遺物の出土はみられなかったが、1トレンチにおいて備前焼大甕片、9トレンチにおいて備前焼大甕片、白磁片、染付片が少量であるが地表面ないし表土中から発見されている。この曲輪2においても主郭と同様に栂牟礼城築造時からさほど土層の堆積はみられなかったものと思われる。

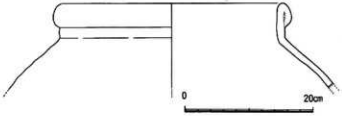
曲輪2出土の遺物は第33図に示した。1は復元口径12cmを測る染付碗であり、体部は内湾気味に立ちあがる。釉には細かい貫入がみられ、口縁付近の内面に幅広の界線1条、外面には上部に細かい界線1条、下部に幅広の界線1条ふれる。2は白磁碗であり、釉には細かい貫入が多くみられる。3は白磁皿あるいは小坏で、釉は淡灰色を呈する。



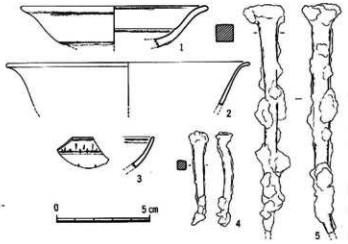
第32図　栂牟礼城跡10トレンチ出土遺物



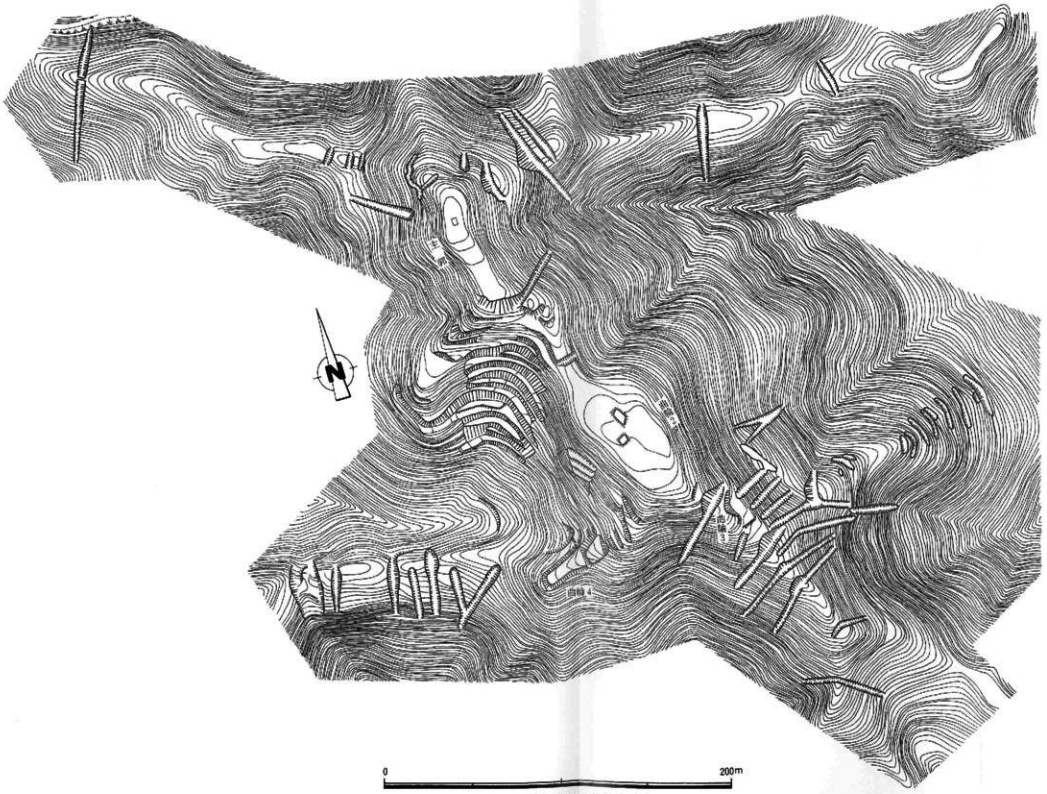
第33図　栂牟礼城跡9トレンチ出土遺物



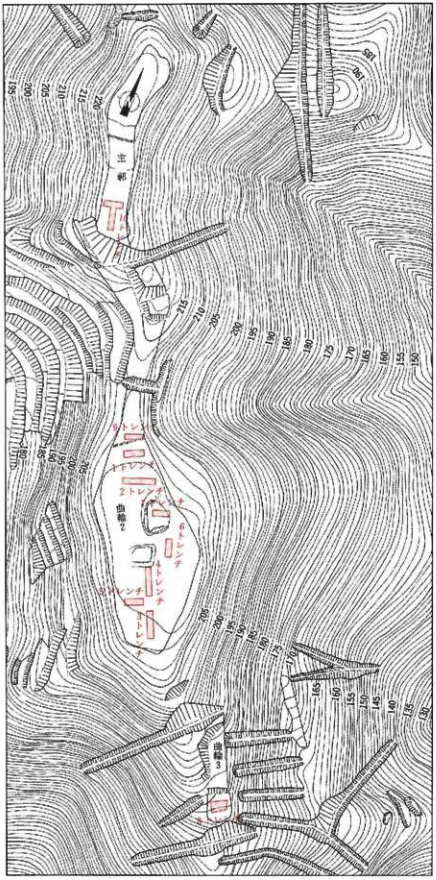
第34図　栂牟礼城跡8トレンチ出土備前焼大甕



第35図　栂牟礼城跡8トレンチ出土遺物



第36図　梅牟礼城跡調査区配置図



第37図　栂牟礼城跡トレンチ配置図

《曲輪３の調査》

曲輪３にはほぼ３×5.5mのトレンチを設定した（第37図）。深さ約35cmを測る地山まで表土のみからなり、地山上において径20cm、深さ20cmのピットを１基確認した。表土中からはトレンチ内に散在した状態で備前焼大甕片が比較的多量に出土したほか染付片、白磁片ならびに鉄釘が２点確認されている。

曲輪３出土遺物は第34・35図に示した。第34図は備前焼大甕である。復元口径35cmを測り、口縁外面の玉縁は下方に長く垂れる。第35図１は染付皿である。復元口径10cmを測り、体部がゆるやかに内湾しながら伸び、口縁部は端反りを呈する。体部内面には段を有し、内面の界線は口縁直下と段の直下に１本ずつ計２本が施されている。また外面には口縁直下と底部付近に１本ずつ計２本の界線がみられる。釉は厚く施されており、細かい貫入が多くみられる。なお外面下半部は露胎のままである。２は白磁皿である。復元口径13cmを測り、口縁部は端反りを呈する。３染付皿である。内面には口縁直下に２本の界線が、また外面には口縁直下に１本の界線がみられ、以下に染付文様が施されている。４・５は鉄釘である。４は断面四角形であり推定全長５cm内外を測る。なお、頭部は直角に曲げられている。５も断面四角形であり、推定全長13cm内外を測る。なお、頭部は眼方形を呈する。

（原　田）

(1)　小野　英治「柳牟礼城の規模と構造」（『佐伯史談』 第122号 佐伯史談会 1980年）
(2)　村田　修三『縄牟礼城』（『図説中世城郭事典』３ 新人物往来社 1987年）

第3章 ま と め

《稲垣・上岡地区》

発掘調査は栂牟礼城山頂部およびその東側麓の大字稲垣字長畑・掃木・下掃木・天神ノ下・引地・引地ノ下・古市の各地区においてトレンチを設定した。稲垣地区においては中世期の遺跡の存在が想定される場所に住宅が密集して建てられているため、トレンチは住宅間の畑地を中心として設定した。それゆえトレンチも広範囲には設けることはできず、各調査区ともピット・土坑・溝などを検出しピットには掘立柱建物としての並びが確認できたものも存在するが、それぞれの遺構がどのような性格をもつものか明らかにしえない。それゆえ本事業に先立ち調査された稲垣字掃木・太田地区での成果[1]も含めて遺物を主体に稲垣地区の歴史の推移を整理してみたい。

稲垣地区における中世期の遺物は古市地区においてその出現をみる。古市地区1トレンチⅢ層およびⅣ層直上ピット内から13世紀後半～14世紀前半に位置付けられる遺物群が出土しているが、稲垣地区においてそれ以前の遺物の広がりはほとんどみられない。栂牟礼山東麓部において中世期の遺跡を概観すると、小字古市の南側に位置する丘陵縁辺に建てられた「くじんの塔」と呼ばれる十三重層塔下には鎌倉時代後半の蔵骨器群が埋納されていたが[2]、「くじんの塔」自体は野津町王子所在の九重塔と同一形式であり、この九重塔が文永4年（1267）銘をもつことから「くじんの塔」は文永年間前後に造立されたものと考えられ[3]、古市地区の遺物群はこれに前後する時期幅をもつ。小字古市は大字稲垣の谷部の入り口に南北に長くのびる地区であり、西にひろがる小字後田、東側にひろがる小字川田のそれぞれの水田地帯に比較すれば1.0～1.5m地形的に高く、現在も中央に縦貫する道の両側に住宅がみられる。東側の小字名に「川田」・「川口」などがみられることや、「川田」・「川口」を含め、その東南地域の現地形が旧沼濫原状を呈していることなどから、「古市」という地名をもつことと併せて古市地区は旧番匠川に面した鎌倉時代後半の市場町としての様相をもつのではないかと推測できよう。それゆえ、鎌倉時代後半期には旧番匠川沿いの「古市」に市場町がひらけ、その南端丘陵部には十数個の蔵骨器を納めた十三重層塔が屹立するという中世像が想定されよう。

古市地区においては、これ以降につながる中世期のまとまった遺物は確認されておらず、14世紀後半～15世紀前半のまとまった遺物は大字上岡・稲垣においてもみられない。しかし15世紀後半に至ると大字稲垣字長畑・掃木、大字上岡字大田において比較的まとまった遺物の出土がみられる。これらの調査区では16世紀代までの遺物が確認されているが、栂牟礼山東麓の水田地帯を見下ろす微高地上に遺跡の広がりが認められる。当時代は『栂牟礼実録』・『大友興廃記』などから栂牟礼城を舞台に佐伯氏が県南部において覇を唱えた時代であり、佐伯氏居館をはじめとした城下町が形成されていたと推測できよう。佐伯氏惣領家居館に関してはその候補地として①堅田地区長谷の高城、②堅田地区長良の上の台、③鵜山古城、④弥生町上野地区上小倉、⑤鶴岡地区古市、⑥上岡地区などの諸説がとりあげられているが、佐伯氏惣領家と密接に繋がる伝承・文化財等がいずれも栂牟礼山東麓に集中することから、前記の⑤、⑥の説が最も可能性の高いものとして指摘できることは乙坪政巳氏により明らかにされているが[4]、乙坪氏が指摘した最も可能性が高いとされる愛宕神社境内に関しては、1989年度調査において中世の遺構・遺物はほとんど確認されておらず、その可能性は薄いものと考えられる。しかし他の候補地とされる本戸城・字土井ノ内などに関しては遺構・遺物の実態は把握できず、今後の課題として残しておきたい。いずれにせよ佐伯氏惣領家およびその家臣団の居住地は栂牟礼山東麓一体に広がる様相が今事業の試掘調査の結果、推定できるものとなった。

《栂牟礼城跡》

栂牟礼城址の発掘調査では主郭をはじめとして主要な曲輪においてどのような遺構遺物が残されているか、トレンチ調査によりその実態の把握を試みた。各トレンチ調査の結果、主郭および曲輪2では本来の丘陵尾根を掘削して平坦面を造成し、その削平は岩盤部にまで至ることが明らかとなった。遺構の検出に関しては、岩盤自体に多くの摂理がみられるうえ、表土中に多量の角礫が含まれており、また木根による攪乱が著しく遺構の検出は

困難をきわめた。今後、いずれ主郭・曲輪部のより広範囲の調査が実施されれば、その遺構の存在ないし配置の具体像が明らかとなってくるであろう。

栂牟礼城は同時代の文献資料がみられないものの、栂牟礼城を舞台にした戦闘は大永年間および天正年間の2回の記録がみられる。まず大永年間の戦闘は、『大友興廃記』によれば大永7年（1527）10月上旬より、また『栂牟礼実録』によれば大永7年1月上旬より大友義鑑の命を受けた臼杵長景率いる二万余の軍勢に対し籠城戦を試みたものである。大友軍の先手は小倉山・小田ケ峯に陣取り、また床木山・宮河内山・平井山・土崎山などに陣を張り、臼杵長景本陣は河俣寺山に定めているが、大友軍は佐伯惟治軍の籠城する栂牟礼山に対して広く北西部の丘陵部に陣を張り対峙していたことがわかる。その籠城期間は大友義鑑から久保中務丞に宛てた「大友義鑑感状」によれば、大永7年11月13日には落城していたことが明らかなことから、開始期が遅く記載されている『大友興廃記』からしても1カ月余り籠城戦を継続していたことがわかる。

天正年間の戦闘に関しては、『大友家文書録』によれば天正14年、島津軍の豊後侵攻に際して、同年10月23日島津軍の勧降使を斬り、これに対応して島津軍は二千余兵で佐伯惟定の籠もる栂牟礼城を攻撃したとされている。また、翌日には島津軍は堅田地区に侵攻し、堅田地区において佐伯軍と島津軍との壮絶な合戦が行われたと記されている。栂牟礼城における籠城戦の状況は明らかではないが、翌年、正月に秀吉から佐伯惟定に宛てられた感状によれば島津軍の猛勢に屈せず栂牟礼城を堅守した状況が窺われ、栂牟礼城において壮絶な戦闘が行われたことがわかる。史書において栂牟礼城に関する記録がみられるのがこの2回限りであるが、その築造時期も明らかではなく、中世長きにわたり、いつどのように使われていたかは考古学的発掘調査に頼るしかない状況にある。

今回の発掘調査においては少量ながら出土遺物を観察すると、備前焼甕は間壁忠彦編年のⅣ期の資料であり[13]、15世紀から16世紀前半にかけておさまることがわかる。また、外面に細線蓮弁文が施された青磁碗は上田秀夫編年のB－Ⅳ類におさまり、15世紀後半から16世紀前半を主体に16世紀を通じてみられる[14]。さらに白磁類は口縁部端反りの形態をもち、森田勉分類のE群におさまり、16世紀を通じてみられる様相を示す[7]。染付に関しても小野正敏分類の染付皿C群（碁笥底を呈す）、染付皿B_1群（高台をもつ端反り皿）など15世紀後半から16世紀前半の資料がみられるほか、染付皿E群（低い内湾した胴をもつ高台つき皿）など16世紀後半にのみ出土する染付も含まれる[15]。

以上の出土遺物の帰属時期を整理した場合、若干ではあるが、15世紀後半から16世紀前半におさまる一群と、多数の16世紀後半におさまる一群に分けられよう。そこで史書にみられる栂牟礼城に関する記述から、大永年間の戦いに際して城内で使用された土器群が前半期に位置付けられる一群に対応し、また、栂牟礼城本体における戦闘の状況が明らかでない天正年間の戦いに伴う土器群が後半期の一群に対応する可能性が高いと考えられよう。また、それぞれの遺物の出土地点を検討した場合、新相の遺物は主郭・曲輪2・曲輪3のそれぞれの調査地点から出土し、特に曲輪3からは新・古相それぞれ比較的まとまった出土量がみられた。それゆえ大永年間の戦いで山上に籠城していた証左になりえるものであろうし、特にその戦闘の実態が明らかでない天正年間の戦いでは幾重にも堀切り・竪堀により防御施設をととのえた曲輪3において熾烈な戦いが行われたことを物語るものであろう。

（原　田）

(1) 佐伯市教育委員会『栂牟礼城址と関連遺跡発掘調査概報Ⅰ』1988年
(2) 小田富士雄「第三節　大分県の火葬墓」『白潟遺跡』佐伯市教育委員会　1958年
(3) 望月友善『大分の石造美術』　木耳社　1975年
(4) 乙坪政巳「佐伯惣領家の居館について」『栂牟礼城址と関連遺跡発掘調査概報Ⅱ』1990年
(5) 間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート(3)－備前焼窯址の分布とその性格－」（『倉敷考古館研究集報5』1968年）
　間壁忠彦『考古学ライブラリー60　備前焼』　ニュー・サイエンス社　1991年
(6) 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」（『貿易陶磁研究』第2号　1982年）
(7) 森田　勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」（『貿易陶磁研究』第2号　1982年）
(8) 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と編年」（『貿易陶磁研究』第2号　1982年）

長畑地区平成元年度トレンチ遺構検出状況

長畑地区平成 2 年度トレンチ遺構検出状況

長畑地区平成 2 年度トレンチ遺構検出状況

長畑地区SK 6 遺物出土状況

掃木地区 6 トレンチ遺構検出状況

掃木地区 6 トレンチSP 3 青磁出土状況

掃木地区 7 トレンチ北壁土層状況

掃木地区 7 トレンチ遺物出土状況

図版 2

掃木地区 9 トレンチ遺構検出状況

掃木地区10トレンチ遺構検出状況

掃木地区10トレンチSK 1検出状況

下掃木地区 1 トレンチ完掘状況

天神ノ下地区 3 トレンチ北壁土層状況

引地地区（愛宕神社境内）全景

引地・引地下地区遠景

引地下地区遺構検出状況

古市地区 1 トレンチ近世遺構検出状況

古市地区 1 トレンチ包含層遺物出土状況

古市地区 1 トレンチ中世遺構検出状況

古市地区 1 トレンチ中世SP15遺物出土状況

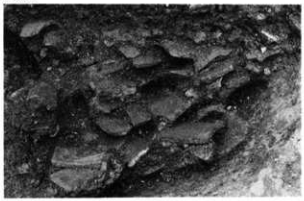
古市地区 1 トレンチSK 1 検出状況

古市地区 1 トレンチ北壁土層状況

古市地区 2 トレンチ遺構検出状況

古市地区 2 トレンチSX 1 遺物出土状況

図版4



古市地区2トレンチSX1遺物出土状況

古市地区2トレンチ遺構完掘状況

古市地区2トレンチ西壁土層状況

古市地区2トレンチ東壁土層状況

柳牟礼城跡曲輪2近景

柳牟礼城跡主郭10トレンチ完掘状況

柳牟礼城跡曲輪2．7トレンチ完掘状況

柳牟礼城跡曲輪3．8トレンチ遺物出土状況

第4章　付　　論

1　栂牟礼城の堀切り・竪堀群とその歴史的性格

海老澤　　衷

I

最初に栂牟礼城を踏査したのは、1984年7月のことであった。この時は大分県史の執筆のため、小野英治氏のご案内を得て弥生町側から西斜面を登って主郭に至った。とくに細かな遺構観察をすることを目的とするものではなく、中世史執筆の上で各地域の城郭を認識しておかなければならないというやや切迫した意識に基づくものであった。小野氏が執筆された『日本城郭大系16』（新人物往来社　1980年）の栂牟礼城の項のコピーを手に懇切な解説を伺いながら頂上部を歩いたが、実はこの踏査が城郭研究の専門家の教えを実地に受けた初めての機会であった。80年4月に大分県教育庁に赴任した筆者は、宇佐風土記の丘歴史民俗資料館の勤務のかたわら、82年から三重町惣田遺跡・玖珠町伐株山遺跡の概報・報告書作成の手伝いをするうちに、荘園や中世村落の研究には城館調査が必須であることを再認識することとなったのである。84年12月荘園村落遺跡調査の一環として、資料館の真野和夫氏とともに豊後高田市烏帽子岳城の測量を行った。悪天候ではあったが、真野氏の指導のもと手際よく図面が作成され、85年3月刊行の概報『豊後国田染荘Ⅲ』に荘園村落遺跡調査としては初めて城郭の実測図を掲載することができた。84年の年末から85年の夏にかけて、すでに城館分布調査報告書を刊行していた熊本県の城郭を桑原憲彦氏・大田幸博氏の教示を得ながら20カ所程歩くことができ、この経験が『豊後国田染荘の調査』Ⅰ・Ⅱ刊行の一つのペースとなっている。

II

栂牟礼城を最初に踏査してから、10年近い年月が経った。このあいだに城郭研究は長足な進歩を遂げている。70年代までは城郭研究者と埋蔵文化財担当者および文献史学の研究者とのあいだには、目立った組織的交流はなかったように思われるが、84年に第1回全国城郭研究者セミナーが開かれたのを一つの契機として、歴史学の新しい潮流が湧き巻くように展開し始めたのである。その軸にあったのが村田修三氏であり、戦国社会の研究を文献史学の立場から深め、さらに自ら城郭の縄張り調査を実践され、城郭研究の学術レベルを飛躍的に向上させた。村田氏は栂牟礼城についても自ら調査され、『図説中世城郭事典』第3巻（新人物往来社、1987年）に執筆されている。このように城郭研究が進展するなかで、89年10月再び栂牟礼城を踏査する機会を得た。今度は佐伯市の調査として行ったもので、空中写真測量図が作成されたことから詳細な検討が可能となった。ここでは発掘調査の際の呼称にしたがって堀切り・竪堀の存在する場所を主郭・曲輪2・曲輪3・曲輪4の各ゾーンに区分けして考察してみた。（第38図参照）

(1)　主郭ゾーンの堀切り・竪堀群

防御機能面から見た堀の関係を考えれば、先ず取り上げるべきはBとCである。この城で他に類を見ない見事な二重堀で東に伸びる尾根を切断している。B・Cがセット関係にあることは明らかであり、Dはこれを補助するものであるが、B・Cの規模に匹敵するものである。Cが北斜面に伸びる竪堀としての機能を有するのとは対称的に南斜面に伸びる竪堀としての機能を持っている。B・CとDとは同一の構想のもとに造られたものである可能性が強い。さらにEはDを補うためのものであるが、尾根の鞍部を避けて造成されている。堀切りAと竪堀Gはあわせて東の尾根に対する防御性を高めるものである。B・Cとは同時期・同一構想のものであろう。Nにつづくｉ・Ｊ・Ｋは西に伸びる尾根を切断したものであるが、何れも規模の小さな堀切りで三つがセット関係に

あると見て良いであろう。この尾根の延長上に大規模な堀切りMがあるが、中央に土橋を残し、竪堀を両斜面に対称的に配したとも見なせるものである。Fは南面の切岸から伸びる竪堀であり、尾根の堀切りを含むものと見なせる。Hは西斜面には珍しい大規模な竪堀である。このほか防御施設として特徴的なのは曲輪2につながる尾根を切断した堀切りLである。この部分には切岸で成形されたテラスを持ち、この西斜面に切岸によって造成された11段におよぶ帯曲輪が存在する。以上のところを図示すると次の通りである。

M←[K=J=I]−N　[G−A]−[B=C]→D→E　　□は曲輪の中心部

H □ F　　‖・＝は対等なセット関係を示す

L　　−は緊密な関係にあることを示す

→・↓は補助的・副次的な関係を示す

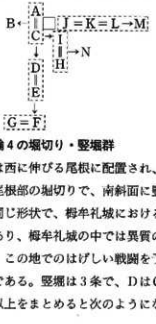
(2) 曲輪2の防御施設

曲輪2にはあまり防御施設が施されていない。これは曲輪3・曲輪4そのものが曲輪2を防御するための施設であったためであるかも知れない(既述のように曲輪の呼称は発掘調査による)。西斜面には若干の切岸が見られるが、東斜面については主郭の横堀Lにつながる切岸以外には遺構が残っていない。

(3) 曲輪3の堀切り・竪堀群

曲輪3は全部で13条におよぶ堀切り・竪堀を確認でき、この城全体の中で最も防御に重点を置いたところである。曲輪2および主郭につながる尾根を断ち切るAが最も重要な位置にある。このAは堀切りであると同時に西斜面にのみ伸びる竪堀であるという特徴をもつ。これと形態的に類似するものとしてCをあげることができるであろう。CはAより規模は小さいが、やはり堀切りとそれに連続し、西斜面に延びる竪堀からなっている。AとCは曲輪3の中心部を軸として対称的な位置にあり、セット関係にある。おそらく同時期に同一の構想をもって造成されたものであろう。つぎにDとEは尾根先端部を切断する堀切りであると同時に東西両斜面に伸びる竪堀を有し、規模もほぼ等しい。DとEもセット関係にあり、この場合は二重堀と呼び得る。このほか堀切りと竪堀を兼ね備えるものとしてFとGがあるが、位置的にみてA・C・D・Eよりはるかに副次的な役割のものである。

次に純粋に竪堀であるものを見よう。まずIであるが30m程降った後、二又に分かれる特異な形をもつ。これはCを補助して防御力を高める狙いをもつものである。HもIと同様な目的のもとに造られたものであり、Nはさらに H・Iを補佐する役割を担うものである。このような一連の流れとは別の構想にあるのが、J・K・Lのグループであり、規模が同様で高さも等しいことからこの三つがセット関係にあることは間違いない。このグループの築造の後にMが付加されたものであろう。以上の関係を図示すると次のようになる。



(4) 曲輪4の堀切り・竪堀群

曲輪4は西に伸びる尾根に配置され、合計7条の堀が確認できる。尾根を断ち切るものは4条確認でき、C・E・Fは尾根部の堀切りで、南斜面に竪堀として連続するもので、曲輪3のA・C、主郭のC・Dなどにみられるものと同じ形状で、栂牟礼城における最も基本的なタイプである。これに対してGは尾根を切っているが、最大幅20mあり、栂牟礼城の中では異質の堀切りであり、中央北斜面には岩盤が露出し、二重堀のごとき状況を呈している。この地ではげしい戦闘を予想して造築したことを思わせ、栂牟礼城の中では最大の労働力を投下した堀切りである。竪堀は3条で、DはC・Eを補助するものであり、Bも同様で、B、Aの切り合い関係は明瞭でない。以上をまとめると次のようになる。

G－F＝E＝C □
↓ ↓ ↓
D BA

Ⅲ

以上、堀切りと竪堀を中心として栂牟礼城の防御施設を考察してきたが、ここで遺構全体からその類型を抽出してみよう。

（α）尾根の稜線を断ち切る堀切り

＜例＞主郭のA・E・I・J・K・L・N、曲輪4のG

（β）堀切りに片側斜面の竪堀が連続する

＜例＞主郭のC・D・F、曲輪3のA・C・F、曲輪4のC・E・F

（γ）堀切りに斜面の両側に竪堀が連続する

＜例＞主郭のB・M、曲輪3のD・E・G

（δ）α・β・γあるいは他の竪堀の補助としての役割を担う竪堀

＜例＞曲輪3のB・H・I・M・N、曲輪4のB・D

（ε）α・β・γから独立している竪堀

＜例＞主郭のH、曲輪3のJ・K・L

連郭式の山城の常としてαとγが重要な位置を占めることは言をまたないが、栂牟礼城の場合にはβがそれに劣らず、曲輪を守る要所に配置されている。β型については地勢的な必然性があったわけでもなく、このような意図と構想をもって意識的に造成したと考えざるを得ない。通路を確保するため片側に竪堀を設けなかったとも考えられるが、主郭におけるBとCとの関係を見ると β・γを組み合わせることに意味があったといえる。

一般に山城の堀切り・竪堀の個々の正確な築造年代を判定することは難しいが、全体の構造を考察することによって築造の順序を推定することは可能である。栂牟礼城をめぐる軍事的緊張が高まったのは1527年（大永7）と1578年（天正6）～1586年（天正14）であり、堀切り・竪堀の大半はこの二つの時期に集中的に築造されたものであろう。前者は戦国大名大友義鑑に対する現地生え抜きの豪族佐伯惟治の謀反によるものとされる。大友氏の命を受けた臼杵長景が2万余の兵で栂牟礼城を攻めたが落城せず、謀略を用いて佐伯惟治を誅殺したと伝えられる。この時の栂牟礼城には佐伯氏の築城構想が反映していたと考えられる。

これに対して後者は強勢となった島津氏と大友氏の総力戦となったもので、日向耳川で大友氏が大敗した1578年以降、佐伯の地はしばしば島津氏の侵略を受けており、栂牟礼城は大友氏の重要な防衛拠点の一つであった。したがって、この時大友氏は佐伯惟定に命じて栂牟礼城の防衛施設を構築したもので、他地域の例からすれば、それは主に竪堀群の整備であったと考えられる（『城郭調査ハンドブック』P170，新人物往来社　1993年）。以上二つの時期をそれぞれ前期、後期として区別したい。

まず、前期であるが、発掘調査の結果から曲輪3がすでにこの時期使用されていたことが判明している。この曲輪の基本的縄張りはAとCの二つの堀切りであろう。このβ型の2条を基軸として、堀切りと組み合わせた小規模な竪堀Bがこの曲輪を構成する基本的な堀切り・竪堀群である。私はこれが大永年間の城主であった佐伯惟治の構想による縄張りであったと考える。この後、日向耳川の戦いのあった1578年以降に畝状空堀に近似したJ・K・Lのセットをなす竪堀群とD・E・F・Gの堀切り、I・H・M・Nの補助的な竪堀が築造されたものであろう。

次に主郭は竪堀が2条と特殊な構造を持つMがあるほかは、αまたはβ型の堀切りが主体であり、曲輪3で想定した大永年間の状況に近い。2条の竪堀のうち、Gは堀切りとセットになるもので、曲輪3にも見られるものである。したがって、城郭全体の中で北に位置する主郭の場合、後期にはほとんど新たな築造がなかったのでは

ないか（Mのみは後期の築造であろうが）。これは薩摩軍が栂牟礼城の南方に陣を構えたことと符合する。なお、主郭では西斜面の帯曲輪群が注目されるが、千田氏の指摘にあるように城兵の駐屯所と考えられる。テラスが尾根で囲われ、頂上部よりも強風を避けることができ、下部は急斜面となる最適の地である。大友氏と島津氏の総力戦となることを予想して天正6年以降に築造されたと考えるべきであろう。

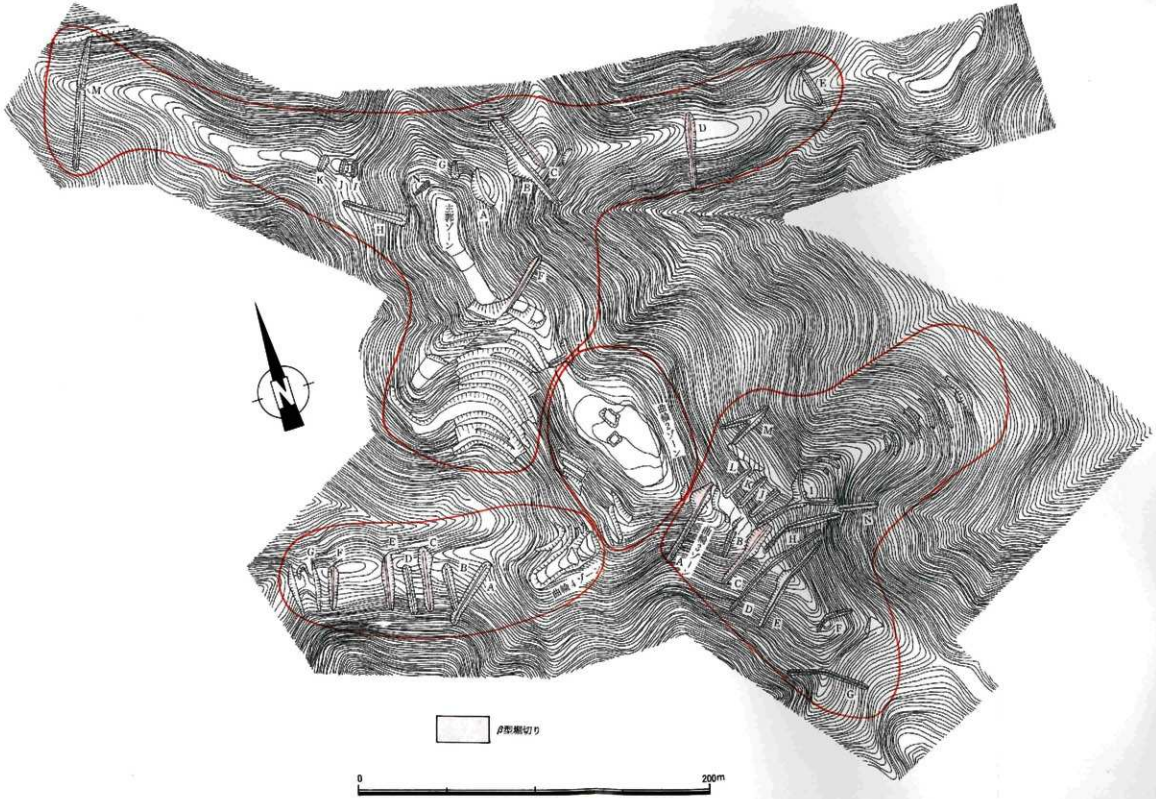
曲輪4においては、曲輪3、主郭と同様な想定が許されるなら、C・E・Fのβ型堀切りが存在することから、前期に築造されたものであると考えられ、Gもこれらと緊密な関係にあり、A・B・Dもβ型堀切と有機的に関連している。小野英治氏の御教示によれば、大永7年の合戦を記した『大友興廃記』の「敵七ツ堀口へ打出る」（敵は佐伯惟治の軍勢を指す）とある「七ツ堀口」がこの地に相当する。確かにこの合戦に際しては曲輪4の尾根つづきである小田峯に大友氏の陣が張られている。小田峯を相城としているわけであるが、佐伯軍はこの尾根伝いに打って出て、大友軍を攻めたものであり、この地で激しい戦闘があったことは事実であろう。Gが栂牟礼城全体を見渡しても特異な位置にあるのはこのためであり、曲輪4の合計7つの堀切り・堅掘の中で、軍事的緊張が最も凝縮された場であったと考えられる。

図版5　曲輪4ゾーンのG（七ツ堀口の大堀切り）

図版6　曲輪3ゾーンのC（曲輪3の下の堀切り）

Ⅳ

以上細部にこだわった考察になってしまったが、発掘調査によって時期が明確となった曲輪3におけるβ型の堀切りを手がかりとして佐伯惟治が城主の時期を中心に栂牟礼城を復原してみた。β型堀切りを佐伯氏独自の築城構想によるものと断定するには、さらに豊後全体の中世城郭を検討していかなければならない。何れにしてもこのような考察が可能となったのは、空中写真測量図の作成と曲輪の発掘調査によるところが大きい。今回の調査によって、大永年間から天正年間にいたる築造状況がよくわかり、その後の改変がきわめて少ないという点で価値の高い城郭遺構であることが改めて確認されたといえるであろう。



第38図　栂牟礼城址堀切り・竪堀配置図

2　山上寺跡出土の中世遺物について

綿　貫　俊　一
後　藤　幹　彦

序

筆者の1人綿貫は，1988年と1989年の両年，佐伯市教育委員会主催の発掘調査にたずさわっていた。とくに1988年の発掘期間中，地元の藤田喜代一氏・佐伯市社会教育課の山田健一氏から栂牟礼城跡周辺の歴史的遺産について多くの御教示を得た。その際，栂牟礼城跡の東方に位置する山塊山嶺部に古い山嶽寺院跡が点在しており，そのうちの1つである山上寺（三乗寺）跡から古鏡・古貨幣が出土していた事実を知った。

「山上寺」について，1989年の古鏡・古貨幣の確認，1993年12月に後藤と伴に寺跡を踏査したことによってその存在を確認した。その結果，遠く平安時代後期（12世紀頃）にさかのぼる古い遺物が観察した他，寺跡と称される地点における地形上の造作痕が良好に観察された。

以下，山上寺をめぐる事柄を報告していくが，「山上寺」跡の踏査に同行された，広瀬キンさん・藤田喜代一さん，発見当時のことを教えて下さった広瀬武士さん，高野テルさん，遺物調査に便宜を計っていただいた山田健一さん（佐伯市社会教育課）に厚くお礼申し上げます。（綿　貫）

1　遺物発見と保管にいたるいきさつ

1940年（昭和15年）の春か秋，某祈禱師と伴に，脇地区の高野フミ，高野カメ，高野イエ，高野ヌサ，高野ミツ，高野文作，高野正一，河野武士，広瀬キン等9名は，山上寺跡に残る「お地蔵様（地蔵浮彫型墓碑）」に参拝している。その際，旧境内地の一角で土中から，鏡7面，古銭約800枚が掘り集められた。その時のことを，当時22歳の広瀬キンさんは「何か器のようなものに入っていた気がする。」と証言している（1993年12月中旬の聴きとり調査の際の証言）。この証言は，遺物の良好な残存状況を見るとき，うなづけるものがある。

その後，掘り集められた鏡や古銭は，屋号が「山上寺・三寺」（山頂部あった山上寺の坊があったことに由来する。）の高野イエさん方で保管されることになったようである。そして高野イエさんの子供である正行さん・サダ子さんに受けつがれ，孫の正勝さんへと受け継がれている。高野正勝さんは，1970～1973年頃，母のサダ子さんから「大切なものだから市に寄贈したら」と言われた事もあって佐伯市教育委員会に寄贈している。1974年に正勝さんは亡くなられたが，この間の事情は1940年当時山上寺跡のお地蔵様に参拝され現在もなお健在でいらっしゃる広瀬キンさん，屋号山上寺の高野家跡に隣接する場所に住んでいる高野テルさんの証言を得た。

なお，寄贈を受けた際の市教委側の記録でも，鏡と古銭が山上寺跡の出土品とされている。こうした経緯があって現在佐伯市教育委員会が保管している。（綿　貫）

2　「山上寺」跡の景観

(1)　地理上の景観

山上寺跡は栂牟礼城の東北部の山塊尾根に建立されていた。栂牟礼城と「山上寺」跡の平面の直線距離は1560mで，この間に門前川が南流する谷がある。この谷あいには，「根小屋集落」に由来すると考えられる平坦な造作地形が観察される他，中世に由来する神社や仏閣が存在していたことを示す地名・伝承が多い。こうした事柄とその地形上の景観が狭小な谷あいであることは福井県一乗谷に通じる。門前川沿いの狭小な谷あいは，北に向うほど更に狭小になる。門前川沿いの谷と同様な谷は，「山上寺」跡が立地する山塊と，より東方に位置する臼坪山・

城山等の山塊にはさまれた間にある。こうした栂牟礼山，山上寺山，臼坪山・城山は全体として見ると南北方向に延びており，中央構造線の１支脈に含まれるが，西から東へ東流する番匠川によって断たれ，形造られた沖積平野が南に望まれる景観である。

さて山上寺山のピークは232m であるが，「山上寺」跡が立地する地点は，南西方向に向って高度を減じながら延る尾根上の地点（標高162.3m）である。この地点から南西方向へ160m の尾根上には「二上寺」跡と称されるフラットもある。「山上寺」跡の地形の大略は，北側には人の手が入っていない自然の尾根部分が残り，この南側が造作によってフラットにされた面が連続する（第39図）。

（綿　貫）

(2)　山上寺跡周辺の宗教景観

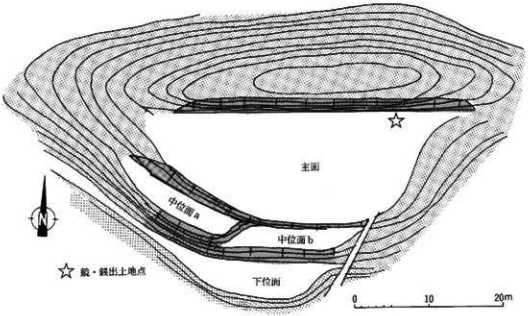
山上寺跡近在に関する近世以前の状況がどのようなものであったのかという事柄は，現在では全く謎につつまれている。そうした中にあって山上寺跡や栂牟礼城跡などの近隣には多くの神社仏閣（跡）の存在が知られている。これらのうちの多くが平安時代や大神姓佐伯氏によって大永年間に建立されたことが，佐伯古社神明記や社伝に記されている。

愛宕神社は栂牟礼城跡の東にある（第39図６）。その祭神は軻遇突智神，すなわち愛宕の神で，大永元年(1521)佐伯惟治が勧請している。こうした戦・火防の神である軻遇突智神を祭神とする愛宕神社・釈魔神社は周辺地区にも多いことが目を引く。列挙すると，佐伯市では古市・上岡・久部・大鮎繋，弥生町では釈魔山・植松に祀られている，これらの愛宕神社は，修験道・密教の本社・霊場の一つである京都府愛宕山に由来する。

佐伯氏が建立した神社としては，今熊神社・祖母嶽明神祠が栂牟礼城跡の東・南東麓にある。今熊神社は京都の今熊野社の分霊を佐伯惟治が大永年間（1521～1527）に勧請している。祖母嶽明神は，大神系一族の出自にまつわる祖母山（姥母嶽）を祭ったもので，多くの大神系諸氏にとって重要な神である（第39図13）。

山上寺跡と関係のある神社としては，大蔵八幡社がある。本来的には「応神天皇」等を祭神としていたのであ

第39図　山下寺周辺の遺跡分布図



第40図　山上寺跡境内模式図

ろうが，現在は今熊神社に合祀されている。しかし社地には，「春江陽公座元・大永六夫八月」という銘の入った春好の墓石がある。この神社は山上寺からみて西北の谷にあり，一帯は門前と呼ばれている。

これまで栂牟礼城跡の山塊と山上寺跡のある山塊に峡さまれた谷に立地する神社を見てきた。こうした地区と，脇地区には寺院跡も点在している。これらの寺は，伝承などから江戸時代に存在した形跡はなく，中世にさかのぼることが予想される。脇の集落内にある二寺，三寺は，北側背後の山頂部にあった二上寺・山（三）上寺の僧の里坊があった為にそう呼ばれている。

脇地区には上記の寺院の他，星の宮神社（第39図23）があった（現在は鶴望板山に所在）。社伝には「延暦3年（784）6月，一夜天明に，星光爛として地を射るあり，仍て祠を建て之を祀る。概武天皇の御宇，延暦年間，脇村の前字一丁畑といへる地に，1個の星隕たり。（佐伯古社神明記）」とある。神体に隕石を祀っていることから考えて，星辰信仰を重要視する陰陽道・密教からの影響が考えられれる。

山上寺や栂牟礼城跡からみて南方向の番匠川を渡った場所に龍護寺がある。創建は社伝によると，正治年間（1199－1200）に山本源太有明が主君緒方三郎惟栄の菩提を弔うための草庵を作ったのに起源する。以来，佐伯氏の菩提寺となった真言宗の寺である。

山上寺は管見の限り，中世文書には登場しない。しかし，一般的にいって佐伯地方を佐伯惟定が去って以来武士団が解体・帰農したこともあってか，中世文書はほとんど伝世していない。山上寺が文書に登場するのは，文政12年巳丑（1829）に書写の記載がある「栂牟礼実録」である。この文書は野史ともいわれ学界では重視されていない。しかし，地名・史実・年代等で実在する場合も多く，江戸時代になお伝存していた中世文書や詳しい伝承をもとに書かれたのだろう。

さて山上寺に関する栂牟礼実録の記述は次のとおりである。「ここに山上寺の住僧春好と云う行徳。外法を兼備し…。」，「春好中しけるは，『昔，栂尾の妙慧上人を次郎と号す。…』」，「…ある時，板の節穴より壇上の次第を透見しけるに，本尊はその色赤きこと燃える火のごとし。形体は手足数多ありて百足のごとし。」，「虚無僧福袗の形と合掌数拝して行を見れば，威綱の三郎，不二の太郎の術を修す。」とある。これらの事柄について佐伯市史では真言密教の茶吉尼天修法としているが，疑問点もあり再考証の必要がある。むしろ栂牟礼実録の記載をそのまま理解すれば，千手観音～金翅鳥王である飯縄示現大明神を祀る密教系修験道の呪法と考えられる。

これまで山上寺や周囲をとりまく宗教遺跡を概観してきた。その結果，中世にかぎれば鎌倉新仏教よりも，密教・修験道・陰陽道などの強い影響を受けた神社・寺院であることがこのあたりの特色と言えよう。（緒　賀）

3 遺構と遺物

(1) 遺構の状況（第40図）

寺院の中心部と考えられる主面は，背後の尾根部分の南側を比高差約３ｍていど切り落して形成されており，面積約20㎡，東西最大長約40ｍの規模を有する。主面の東北部で，切り落し直下に鏡・銭出土地点がある。主面の南には中位面が取り付く。中位面は，中位面ａと中位面ｂに区分できる。このうち中位面ａは約13.5㎡の広さを有し，主面からの比高差は約２ｍ弱である。中位面ｂは約10㎡の広さを有し，中位面ａからの比高差は約15ｍである。中位面の南には約３ｍ～４ｍの比高差をもって下面が取りつく。下面の面積は約21㎡である。これまでみてきた中位面と下位面の東端には，山麓から延びる古道が接しており，上方の主面に達する。なお，下位面の西北方向は緩やかにすぼまり，回廊状の道となり，主面背後から続く尾根に至る。

全体的に観察すると，各面は尾根頂部の南側斜面に高度を減じながら展開している。ようするに尾根の北側ではなく，南側を意識した造作といえよう。この「山上寺」跡は，その立地と江戸時代に作成された「栂牟礼夷録」の記載からすれば密教を修した寺と考えられるので，当然密教系の寺に通有な「金堂・護摩堂」といった主要な建物の位置が問題となる。この点を踏まえ，「山上寺」跡の各面ふり返ってみると，最も広い面積を有する主面に主要堂塔の位置を推定するのが自然であろう。

（綿　貫）

(2) 鏡

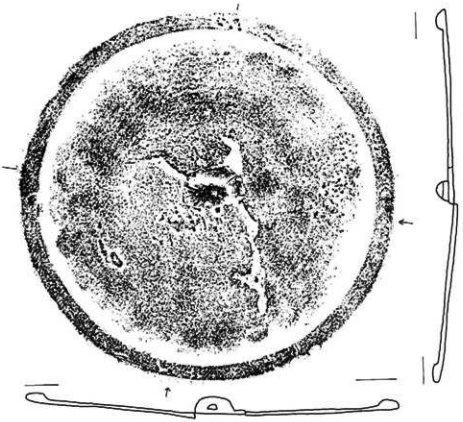
湖州素文円鏡（第41図１）　平面形や背面観は，径が11.09cmの円形で，幅約６㎜の縁帯がめぐる。中央部には長楕円形鈕が位置する。鈕と縁の間には，表面を回転調整した際のものと考えられる微細な線条痕が同心円状にめぐっている。鏡の断面形や側面観は，約2.5㎜～３㎜の厚さをもつ半円形・隅丸台形の縁と，紐状の銅を折りまげたような鈕である。鏡の背面には古紙の皮膜や繊維が観察される。重量は66g。

湖州六花鏡①（第41図２）　平面形や背面観は，最大径が10.4cm，花弁間と対向する花弁間の径は9.9cmの六花形である。また幅５㎜～６㎜の縁帯がめぐり，中央に長方形の鈕が位置する。鏡の背面には磨った痕跡があり，為に紀名号区画がわずかに残る。側面形は，約1.5㎜～２㎜の厚さをもつ台形縁と，板状の銅を折りまげたような鈕に特徴がある。背面と縁は磨られてその比高差がほとんどなくなっている。鏡に観察される付着物には，古紙の皮膜と繊維がみられた。重量は72g。

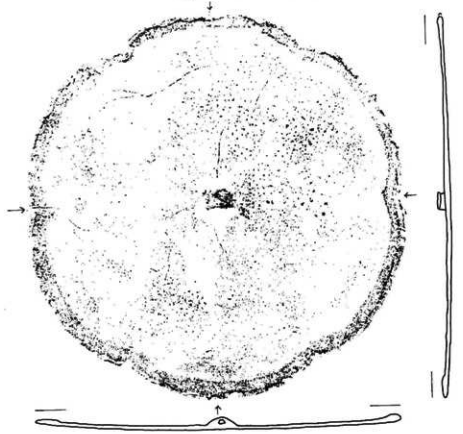
湖州六花鏡②（第42図３）　平面形や背面観は，最大径が10.3cm，花弁間と対向する花弁間の径は9.5cmの六花形である。また幅７㎜の縁がめぐり，中央部に鈕が長方形であったことを示す痕跡が残っている。右半分の中程には不明瞭ながら銘号区画が観察され，「□州真石念二，□□□」とある。鏡縁の厚さが2.0㎜～2.5㎜の台形縁である。鏡胎の厚さは0.9㎜～1.2㎜で，鏡の重量は79g。鈕の痕跡からみると，板状の銅片を折りまげたような鈕であったと推定される。付着物は，古紙状の皮膜と繊維が観察される。重量は79g。

菖蒲双雀双蝶文鏡（第42図４）　平面形や背面観は，径9.85cmの円形を示し，内部は径7.4cmの圏線をめぐらして外区と内区に区分している。外区には斜行する細線が施されるが，内区には絵画的構図となっている。内区には鈕を境として両側に菖蒲を配する。菖蒲に挟まれるように，鈕の上位で花の近くには２羽の蝶が飛かい，鈕の下位で根元近くには２羽の雀が戯れる様となっている。鈕座は花形座系と見られるが，磨滅が著しく不明瞭である。側面形や断面形については，細縁外傾式で鏡面は水平である。縁は細縁外傾式のなかでも，内湾ぎみに立ち上がる点に特徴があり，鏡面側からの高さは5.5㎜，縁の幅は1.5㎜。鏡胎の厚さは0.8㎜～1.1㎜で，界圏は単圏細線である。鈕は低い鈕座の上にゆるやかな山形で乗る。鏡に観察される付着物は，古紙状の皮膜がわずかにみられ，中に繊維が混入する。また，茶褐色の土も若干見られ，マンガン状の黒色粒が観察される。重量は48g。

竹垣菖蒲双雀鏡（第43図５）　平面形や背面観は，径が8.65cmの円形で，内部は径6.1cmの圏線をめぐらして外区と内区に区分する。外区の上・下半部には，細線がそれぞれ左右に二分される形で配される。内区は鈕の下に竹垣が画かれ，その向うに菖蒲が鈕を挟んで立ち上がる。更に鈕の上方には菖蒲の間を飛びかう二羽の雀が描か

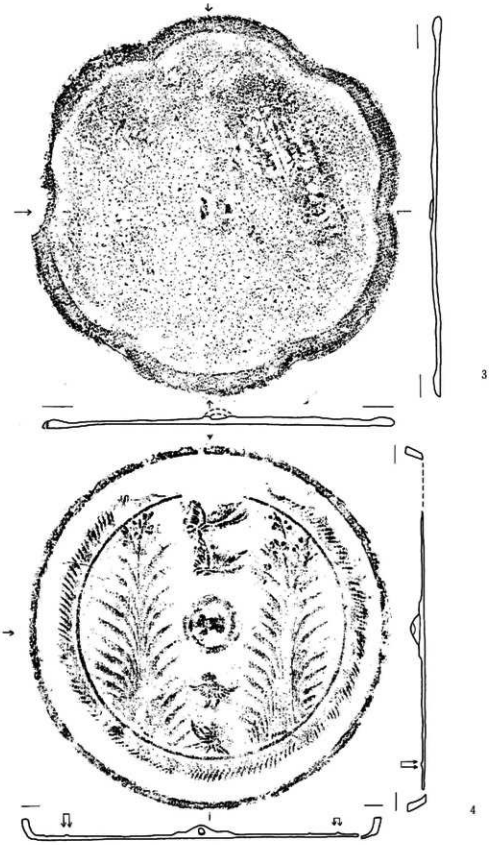


1

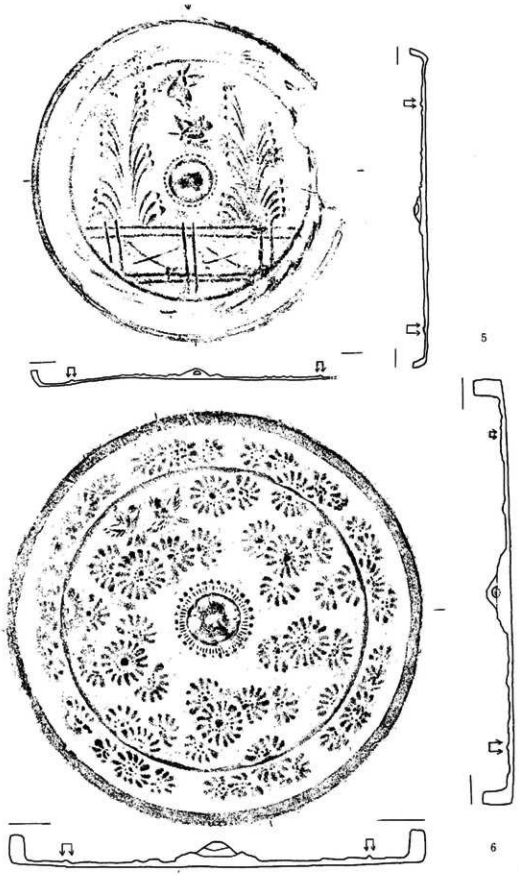


2

第41図　山上寺跡出土銅鏡拓影図と断面図（その１）



第42図　山上寺跡出土銅鏡拓影図と断面図（その２）



第43図　山上寺跡出土銅鏡拓影図と断面図（その３）

れている。鈕の下位には花蕊文と考えられる鈕座がある。側面観や断面形については，細縁外傾式で鏡面は水平である。縁は，内湾ぎみに立ち上がる点に特徴があり，鏡面側からの高さは3.5mm，縁の幅は1.5mm，鏡胎の厚さは0.9mm～1.3mm。界圏は単圏細線である。鈕は載頭円で，ゆるやかな山形の鈕孔を有する。なお鈕は低い鈕座の上に乗る。彫刻文様の断面形は，界圏と竹垣は半円形であるが，その他は緩斜形となっている。なお鏡に観察される付着物は古紙状の皮まく（暗緑色）が顕著で，中に繊維が見られる。その他，茶褐色の土が付着し，マンガン状の粒子が若干観察された。重量は38g。

菊花双雀文鏡（第43図６）　平面形や背面観は，径11.25cmの円形で，内部は径8.25cmの界圏をめぐらし内外区に分ける。菊花は内外区にまたがって散らされる。花同士が切合によって見える部分と，見えない部分の表現がなされている。なお鈕のやや左上方の内区内に，斜めに相対して飛翔する二羽の雀が表現されている。鈕座は花蕊文で修飾する。側面観や断面形は厚縁直角式で鏡面はほぼ水平である。縁上端部幅が2.5mm，縁下部幅は4.5mmとなり，やや中ぶくれ状となっている。鏡胎の厚さは１mm～２mm。鈕孔の形は長半円形である。また鈕孔内部の中央が低い位置である。界圏や菊花は半肉彫風である。鈕の断面形は，載頭円である。付着物は，古紙の皮膜・繊維の他，微細なマンガン風の粒を含む「土」が観察される。重量は201g。

松喰鶴鏡（第44図７）　平面形や背面観は，径が11.2cmの円形で，内部は7.9cmの界圏をめぐらして外区と内区に区分する。内外区ともに松枝を散らす。内区には鈕・鈕座が亀形座鈕となっている。亀の顔部を上方に向けたとき，左右に鶴を配する隔鈕反対布置交互馳貨式をとる。側面観や断面形は，厚縁直角式で鏡面を水平とする。縁は外面がやや内傾する。つまり縁上端部は下方に向かって斜行する。界圏の断面はゆるい尖状式。鈕孔の形は長半円形である。鶴本体は丸い彫りで，羽部と足先部は緩斜な彫法である。口先部，脚部と松葉は針状の細かい幅狭な断面である。縁上端部の幅3.7mm，縁下部の幅5.2mm，縁の高さ１cm，鏡胎の厚さ1.5mm～1.8mm等が鏡の厚さである。付着物は，古紙の皮膜・繊維とマンガンを含む茶色の土が観察される。鏡の重さは241g。（綿　貫）

第44図　山上寺跡出土銅鏡拓影図と断面図（その４）

●出土銭貨

本出土銭貨の総数は797枚で，内判読可能銭数は784枚，判読不能銭数は13枚であり，判読可能銭の全てが中国銭であった。銭種は四銖半両（漢　前0175初鋳）から嘉定通寶（南宋　1208初鋳）までの39種類であり，これら判読可能銭を国別・銭種別に分類し一覧表を作成した（第４表）。さらにこの一覧表をもとに鋳造国別比較図（第45図）・銭種別比較図（第46図）を作成した。

また，資料の保存状態はあまりよいとはいえず判読不能の銭貨は全て強い破損を受けており中には細かい破片に分かれているものもあった。また当時の作業員の証言によると銭貨はばらばらの状態で容器に詰められていたようであり，サシなどを使って整理された状態ではなかったようだ。

各銭貨の特徴（第47図～第51図）

１は半両銭で四銖半両と呼ばれるものであり，数量は１枚のみである。

２は唐で鋳造された開元通寶で総数は59枚は，全て真書体である。小分類は出来ないが裏面に刻字のあるもののみを別にした。※深の刻字のあるもののみ初鋳年が会昌５年（西暦845）である。

３は乾元重寶で総数２枚，全て真書体で小分類不能である。

４は漢元通寶で１枚のみ，真書体で背文があり上弦であると思われる。

５は唐国通寶で総数１枚，篆書体である。

６は宋元通寶で総数５枚，全て真書体で小分類不能である。

７は太平通寶で総数７枚，全て真書体で小分類不能である。

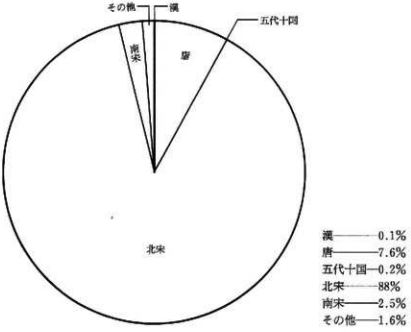
８は淳化元寶で総数５枚，全て真書体である。小分類数は３で，その特徴は，Ｉａ（２枚）は刻字が楷書体である事。Ｉｂ（２枚）は刻字が草書体であり，化の第四画が下にはねている事。Ｉｃ（１枚）は刻字が草書体であり，元の第三画にハネがある事である。

９は至道元寶で総数16枚，全て真書体である。小分類数は３でその特徴は，Ｉａ（４枚）は刻字が楷書体である事。Ｉｂ（６枚）は刻字が草書体である事。Ｉｃ（６枚）は刻字が行書体である事である。（小分類不能数６枚）。

10は成平元寶で総数10枚，全て真書体で小分類不能である。

11は祥符元寶で総数20枚，全て真書体で小分類不能である。

12は祥符通寶で総数７枚，全て真書体である。小分類数は２でその特徴は，Ｉａ（４枚）が刻字が大きい（符



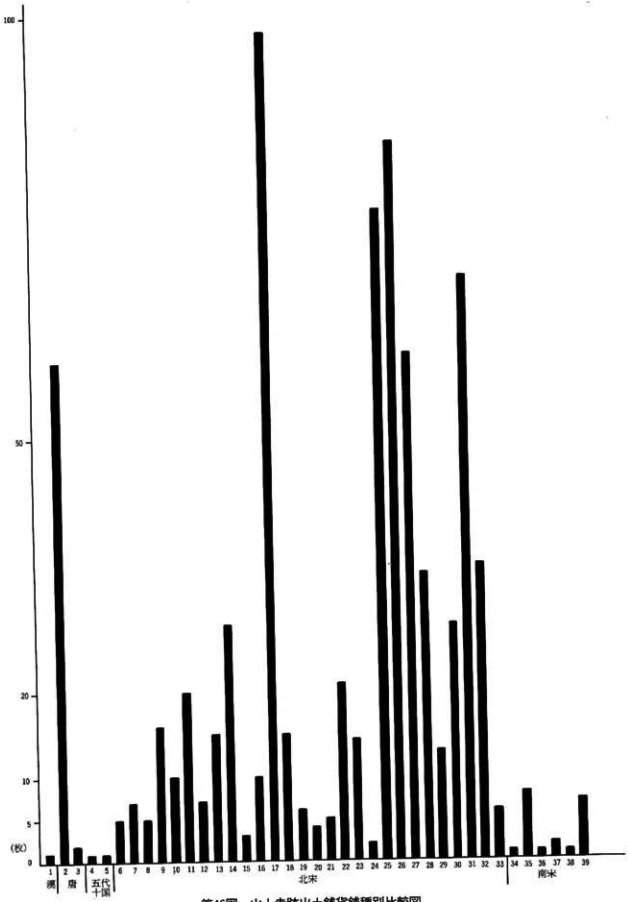
第45図　山上寺跡出土銭貨鋳造国別比較図

(3) 銭　貨

第4表　山上寺跡出土銭貨一覧

No.	国名	名　称	初鋳年(西暦)	枚　数	分類数	備　考
1	漢	四銖半両	文帝5年(紀175)	1	1	
2	唐	開元通寶	武德4年(0621)	59	1	背文銭を含む(22枚)
3	唐	乾元重寶	乾元2年(0759)	2	1	
4	後漢	漢元通寶	乾祐元年(0948)	1	1	背文銭である
5	南唐	唐国通寶	交泰元年(0985)	1	1	
6	北宋	宋元通寶	建隆元年(0960)	5	1	
7	北宋	太平通寶	太平興国元年(0976)	7	1	
8	北宋	淳化元寶	淳化元年(0990)	5	3	星形孔銭を含む(1枚)
9	北宋	至道元寶	至道元年(0995)	16	3	
10	北宋	咸平通寶	咸平元年(0998)	10	1	
11	北宋	祥符元寶	大中祥符元年(1008)	20	1	
12	北宋	祥符通寶	大中祥符元年(1008)	7	2	
13	北宋	天禧通寶	天禧元年(1017)	15	1	
14	北宋	天聖元寶	天聖元年(1023)	28	2	
15	北宋	明道元寶	明道元年(1032)	3	1	
16	北宋	景祐元寶	景祐元年(1034)	10	2	
17	北宋	皇宋通寶	寶元2年(1039)	98	5	星形孔銭を含む(2枚)
18	北宋	景德元寶	景德元年(1044)	15	1	
19	北宋	至和元寶	至和元年(1054)	6	2	
20	北宋	至和通寶	至和元年(1054)	4	2	
21	北宋	嘉祐元寶	嘉祐元年(1056)	5	2	星形孔銭を含む(1枚)
22	北宋	嘉祐通寶	嘉祐元年(1056)	21	2	
23	北宋	治平元寶	治平元年(1064)	14	2	星形孔銭を含む(1枚)
24	北宋	治平通寶	治平元年(1064)	2	1	
25	北宋	熙寧元寶	熙寧元年(1068)	77	4	星形孔銭を含む(1枚)
26	北宋	元豊元寶	元豊元年(1078)	85	2	星形孔銭を含む(5枚)
27	北宋	元祐通寶	元祐元年(1086)	60	2	
28	北宋	紹聖元寶	紹聖元年(1094)	34	2	星形孔銭を含む(3枚)
29	北宋	元符通寶	元符元年(1098)	13	2	
30	北宋	聖宋元寶	建中靖国元年(1101)	28	4	星形孔銭を含む(1枚)
31	北宋	大觀通寶	大観元年(1107)	69	1	
32	北宋	政和通寶	政和元年(1111)	35	3	
33	北宋	宣和通寶	宣和元年(1119)	6	2	星形孔銭を含む(1枚)
34	南宋	建炎通寶	建炎元年(1127)	1	1	星形孔銭である
35	南宋	淳熙元寶	淳熙元年(1174)	8	1	全て背文銭である
36	南宋	紹熙元寶	紹熙元年(1190)	1	1	背文銭である
37	南宋	慶元通寶	慶元元年(1195)	2	1	背文銭である
38	南宋	開禧通寶	開禧元年(1201)	1	1	
39	南宋	嘉定通寶	嘉定元年(1208)	7	1	背文銭を含む(6枚)

(註)　本表の作成にあたり、銭貨の初鋳年の設定は次の文献から引用した。
　　張仲甄　他編著　『簡明銭幣辞典』　上海古籍出版社
　　劉氏成　主者　『中国古銭譜』　文物出版社
　　無編　丁福保　原著　『歴代古銭図説』　陝西旅遊出版社



第46図　山上寺跡出土銭貨銭種別比較図

の横幅が5㎜以上）事。Ⅰb（3枚）は刻字が小さい（符の横幅が5㎜未満）事である。

13は天禧通寶で総数15枚，全て真書体で小分類不能である。

14は天聖元寶で総数28枚，真書体のもの（18枚）と篆書体のもの（10枚）とがあったが小分類不能である。

15は明道元寶で総数3枚，全て真書体で，小分類不能である。

16は景佑元寶で総数10枚，真書体のもの（6枚）と篆書体のもの（4枚）とがあったが，小分類不能である。

17は皇宋通寶で総数98枚，真書体のものと篆書体のものとがありそれぞれ小分類をおこなった，その特徴は以下の通りである。Ⅰa（22枚）は刻字が大きい（皇の横幅が7㎜以上）事，Ⅰb（23枚）は刻字が小さい（皇の横幅が7㎜未満）事。Ⅱa（28枚）は刻字が大きい（宋の横幅が7㎜以上）事と，宋のかんむりと寶のつくりに差異（宋＝𡨦　寶＝寶）がある事。Ⅱb（10枚）は刻字が大きい（宋の横幅7㎜以上）事と，宋のかんむりと寶のつくりに差異（宋＝𡨦　寶＝寶）がある事。Ⅱc（14枚）は刻字が小さい（宋の横幅が7㎜未満）事と寶のつくりに差異（寶＝寶）がある事である。

18は景德通寶で総数15枚，全て真書体で小分類不能である。

19は至和元寶で総数6枚，真書体のもの（4枚）と篆書体のもの（2枚）とがあったが，小分類不能である。

20は至和通寶で総数4枚，真書体のもの（1枚）と篆書体のもの（3枚）とがあったが，小分類不能である。

21は嘉佑元寶で総数5枚，真書体のもの（1枚）と篆書体のもの（4枚）とがあったが，小分類不能である。

22は嘉佑通寶で総数21枚，真書体のもの（12枚）と篆書体のもの（9枚）とがあったが，小分類不能である。

23は治平元寶で総数14枚，真書体のもの（8枚）と篆書体のもの（6枚）とがあったが，小分類不能である。

24は治平通寶で総数2枚，全て真書体で小分類不能である。

25は熙寧元寶で総数77枚，真書体のもの（46枚）と篆書体のもの（31枚）とがあり，篆書体のもののみが小分類可能であった，その特徴は以下のとおりである。Ⅱa（14枚）は刻字が大きい（照の縦幅が8㎜以上）事。Ⅱb（16枚）は刻字が小さい（照の縦幅が7㎜未満）事。Ⅱc（1枚）はⅡa・Ⅱcとは全く違った形状の刻字である事である。

26は元豐通寶で総数85枚，真書体のもの（44枚）と篆書体のもの（41枚）とがあったが，小分類不能である。

27は元佑通寶で総数60枚，真書体のもの（26枚）と篆書体のもの（34枚）とがあったが，小分類不能である。

28は紹聖元寶で総数34枚，真書体のもの（15枚）と篆書体のもの（19枚）とがあったが，小分類不能である。

29は元符通寶で総数13枚，真書体のもの（3枚）と篆書体のもの（10枚）とがあったが，小分類不能である。

30は聖宋元寶で総数28枚，真書体のもの（14枚）と篆書体のもの（14枚）とがあり，どちらも小分類不能であった，その特徴は以下の通りである。Ⅰa（8枚）は刻字が大きい（宋の横幅が7㎜以上）事。Ⅰb（6枚）は刻字が大きい（宋の横幅が7㎜未満）事。Ⅱa（4枚）は刻字に差異がある（宋＝𡨦）事。Ⅱb（10枚）に差異がある（宋＝𡨦）事である。

31は大觀通寶で総数69枚，真書体のもののみで小分類不能であった。

32は政和通寶で総数35枚，真書体のもの（16枚）と篆書体（19枚）とがあり，篆書体のもののみが小分類が可能であった。その特徴は，Ⅱa（6枚）とⅡb（13枚）では和の刻字に差異（Ⅱa－U字形　Ⅱb－円形）がある事である。

33は宣和通寶で総数6枚，真書体のもの（3枚）と篆書体（3枚）とがあるが小分類不能である。

34は建炎通寶で1枚のみ，真書体のものである。

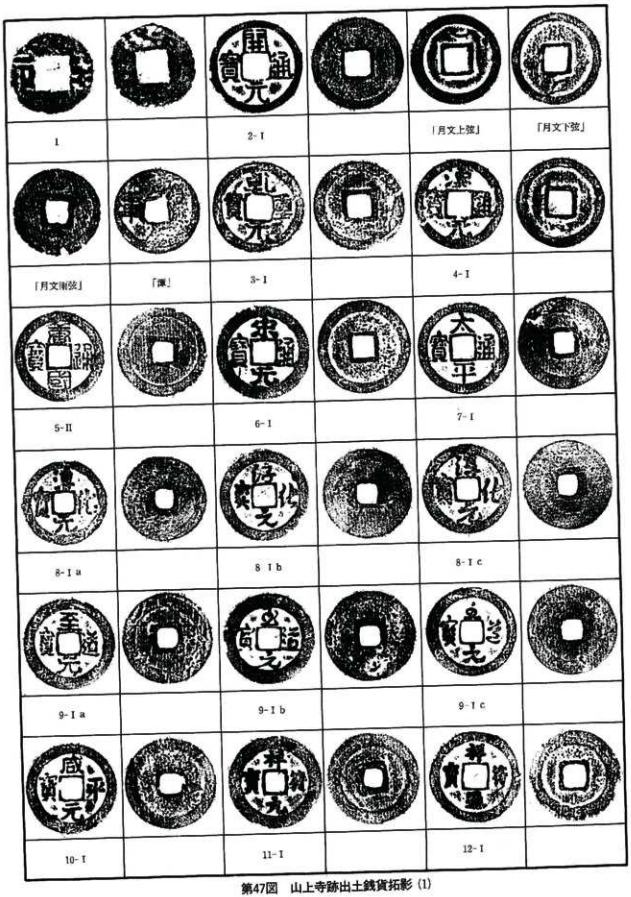
35は淳熙元寶で総数8枚，全て真書体で全てに背文があり，小分類不能である。

36は紹熙元寶で総数1枚，真書体で背文がある。

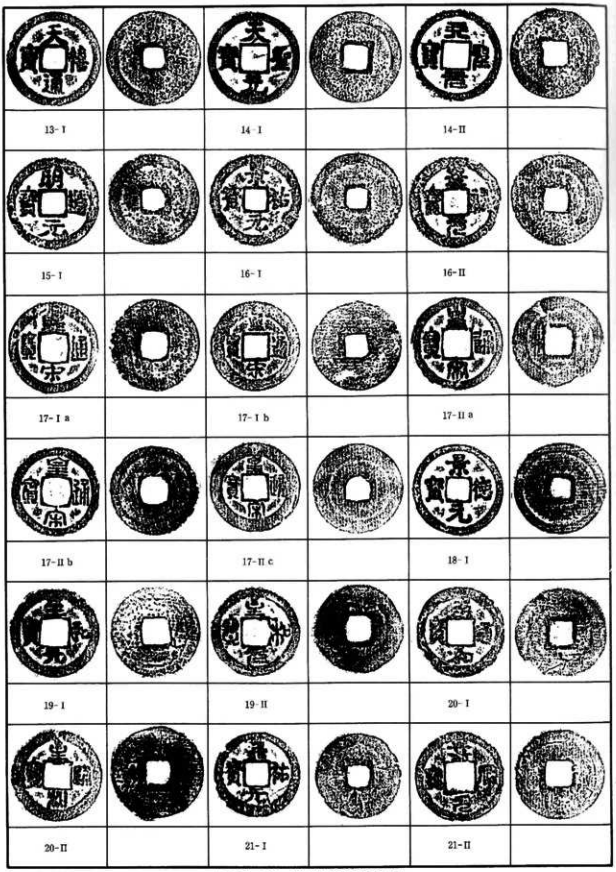
37は慶元通寶で総数2枚，全て真書体で背文があり，小分類不能である。

38は開禧通寶で総数1枚，真書体である。

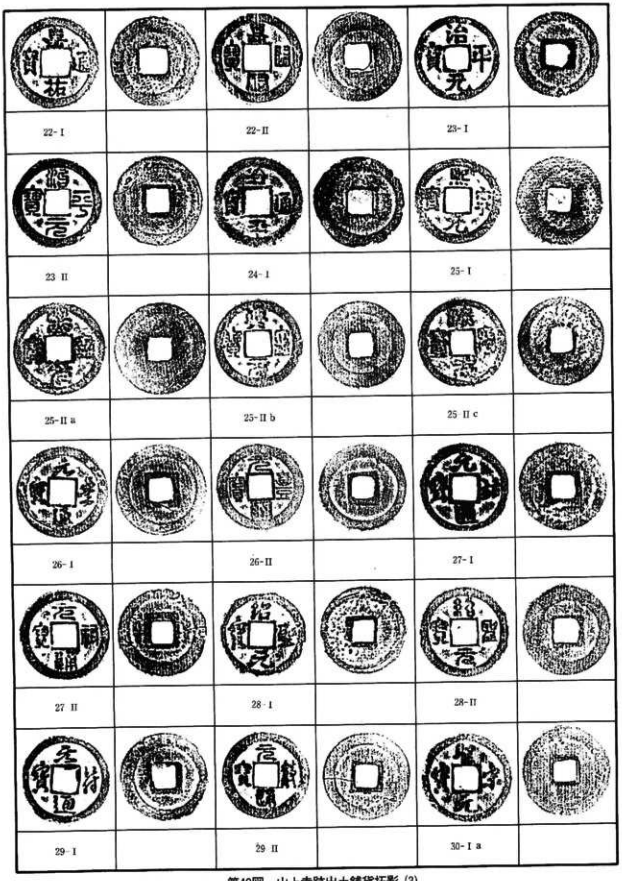
39は嘉定通寶で総数7枚，全て真書体で内6枚に背文があり，小分類不能である。



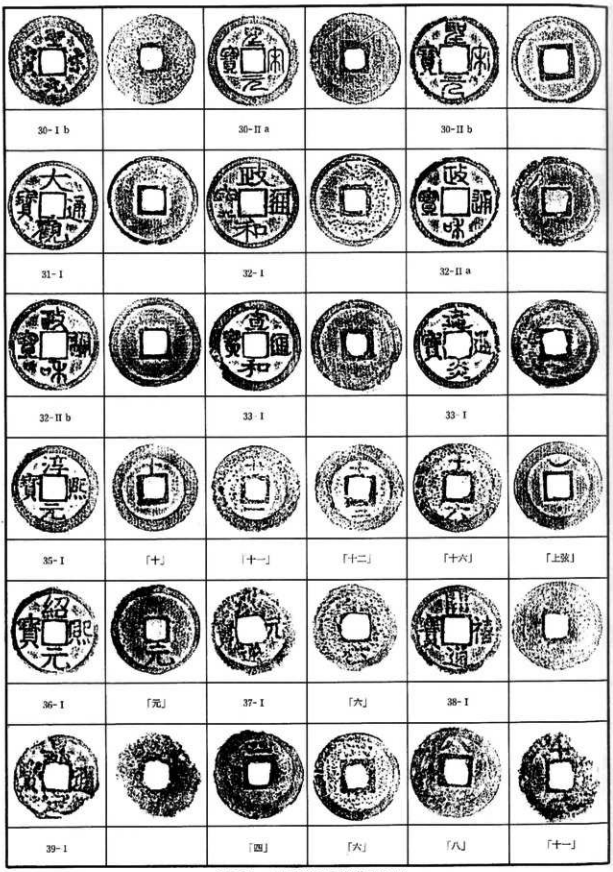
第47図　山上寺跡出土銭貨拓影 (1)



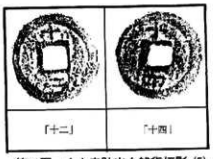
第48図　山上寺跡出土銭貨拓影 (2)



第49図　山上寺跡出土銭貨拓影 (3)



第50図　山上寺跡出土銭貨拓影 (4)



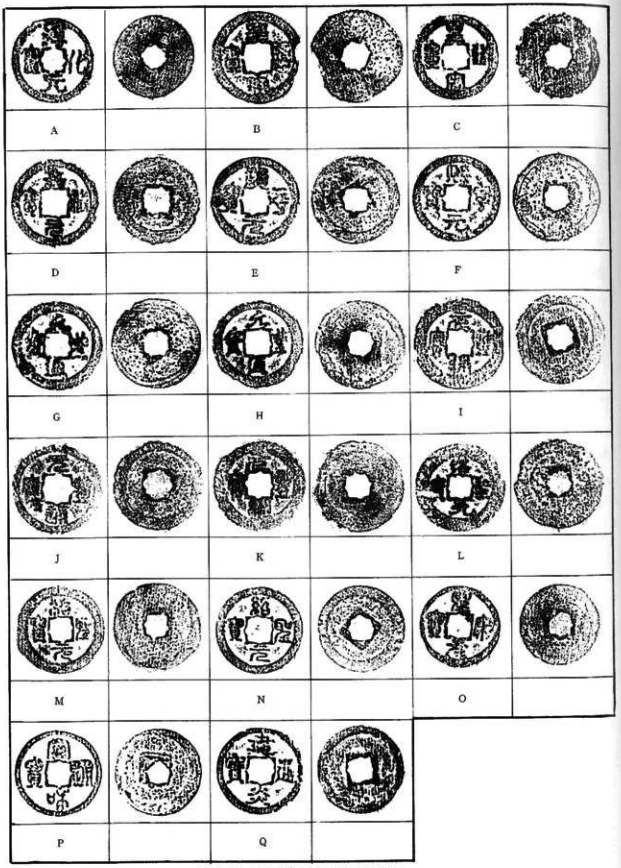
第51図　山上寺跡出土銭貨拓影 (5)

第５表　山上寺跡出土銭貨背文一覧

銭　名	背　　文　　種　（数字は枚数）
開元通寶	「月文上弦」13、「月文下弦」５、「月文両弦」１、「潭」１。
漢元通寶	「月文下弦」１。
淳熙元寶	「十」１、「十一」１、「十二」２、「十六」２、「月文上弦」２。
紹熙元寶	「元」１。
慶元通寶	「六」２。
嘉定通寶	「四」１、「六」１、「八」１、「十一」１、「十二」１、「十二」１。

特殊な銭貨（第12図）

今回調査の銭貨の中に16枚の星形孔銭がある。星形孔銭とは，銭貨の中心孔に四辺とも一ヵ所ずつ切り込みがあり，孔形が星のように見えるものを指す。この星形孔銭は新安沈没船の銭貨や中国本土出土の銭貨内でも確認され報告がなされており[1]，鋳造時もしくは鋳造国内流通中において切り込みを入れたものであると考えられている。これらがどういった目的で加工されたのかについて，はっきりと判明はしていないが，その加工の方法からみても特殊な意味付けがなされていたのは明らかである，鋳造国を含めた今後の研究に期待したい。（後　藤）



第52図　山上寺跡出土星形孔銭拓影

4 まとめ

1) 鏡

ここでは研究史的背景をもとに山上寺跡出土の鏡を位置づけてみる。

湖州鏡は，残された文献等から考えて，その創業年代は西暦1100年前後，衰退年代は西暦1197年頃とされている（王1991）。このことを裏づけるように創業年代をさかのぼる例は中国や日本でもない（第3表）。一方，1197年の「銅器私鑄の再禁止（呉興誌）」以後も湖州鏡は市場に出回っていたものや，使用されていたものもあったようで，中国の南宋末，日本の南北朝時代初頭（新田神社例，1337年）に至るまで用いられている。いずれにしても湖州鏡の最盛期は中国・日本ともに12世紀代から13世紀前半代と言える。したがって山上寺跡出土の湖州鏡は，12世紀代を中心に14世紀にかかる間とまず考えておきたい。

以上をふまえて和鏡を位置づければ，次のようになる。山上寺跡出土の湖州鏡・和鏡の埋納は13世紀前半と考えられる。その根拠としては，12世紀代に盛行した細縁式と13世紀以後急速に増加する厚縁式鏡が組み合っているからである。

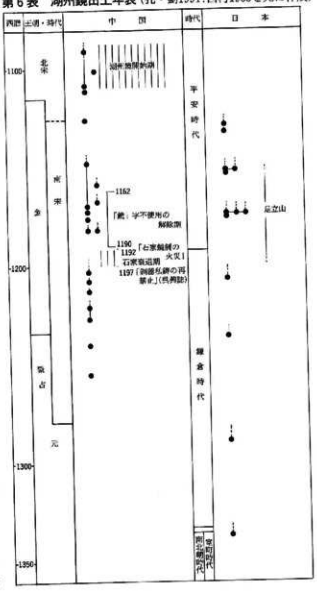
具体的に山上寺跡の厚縁式菊花双雀文鏡を観察すると次のような特徴をもつ。

1．菊花に切合いがあること。
2．二羽の雀の体が相対せずに隔接し，鈕の斜め上方に位置する。
3．文様の高低がはっきりすること。
4．縁が直角式の厚縁であること等の特徴がある。

以上，列記した事柄の中には16世紀代に下るものもあるが，おおむね13世紀代の特徴でもある。しかも13世紀代とされる和泉市久保惣記念美術館所蔵の羽黒山御手洗池中縁菊花双鳥文鏡（金工102），京都府与謝郡府中村籠神社境内経塚の文治五年（1189）銘経塚伴出の籠菊蝶鳥鏡（厚縁）・菊飛雀鏡（厚縁）などに類似する要素がある。したがって，山上寺の菊花双雀文鏡は12世紀末～13世紀前半に製作されたと考えても無理がない。

次に松喰鶴鏡から見た年代上の位置を考えてみたい。まず松喰鶴鏡は，松を喰はない鶴を描く松鶴鏡，芦双鶴鏡，網結松双鶴鏡等も構図の類似から見て久保氏の言うように同一鏡式といえよう（久保1986）。この鏡式の特徴は，双鶴が鈕を中心に旋回し，その間に松等の植物を配する。これらの松喰鶴鏡は，広瀬都巽氏の和鏡年表では（広瀬1974），保安三年（1122）～天治元年（1124）銘を有する茨城県東城寺経塚を最初に，建久七年（1196）銘を有する埼玉県利仁神社経塚の間に収まる。この後，松喰鶴鏡は観察されない。しかし，13世紀代に入ると，広瀬氏の年表や筆者の表（第4表）に示すとおり経塚や紀年の判る鏡は急激に減少するが，広瀬氏の年表においては1206年～1255年の間が空

第6表　湖州鏡出土年表（孔・劉1991，西村1983を元に作成）



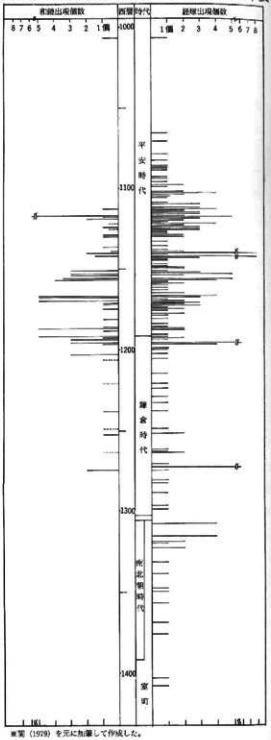
白となっている。筆者は結論として，空白の約50年間を中心とした時期に山上寺跡出土の「松喰鶴鏡」を位置付けたい。その根拠は，鈕が室町時代に盛行する亀であっても，広瀬氏の年表で資料が増加する1255年以降も松喰鶴鏡が全く見られないことが第1の理由である。第2の理由は，12世紀後半に属する松喰鶴鏡の全てが細縁の鏡縁で彫りの浅い文様に特徴があることから，厚縁の鏡縁で彫りの深い文様の山上寺例を同一時期に位置付けることはできない。そうかと言って，型式学上の連続性を考慮すると同一の鏡式である両者を離れた段階に位置付けることもできない。

一般的に12世紀代の細縁式鏡に観察される文様の鈕出は浅く線状の隆起によって表現されるのに対し，13世紀代に盛行する中縁・厚縁鏡の場合は主要文様がレリーフ風に表現される。更に文様に関して付け加えれば，鈕を中心に上半・下半・左半・右半のうち，対極する場所に配置される鶴は，細縁鏡の場合は画面の約3分の2の規模であるが，中縁・厚縁鏡の場合は約3分1に縮小する傾向がある。

そこで厚縁の鏡縁で彫りの深い文様が発達・増加しはじめる13世紀前半期と山上寺例を位置付けるのが順当であろう。尚，山上寺例に亀鈕が見られることは，11世紀代の鏡にも観察されることから不自然ではないことを付け加えておきたい。こうしたことを裏づける事例として，12世紀を中心に盛行する細縁式松鶴鏡と13世紀を中心に盛行する厚縁式松鶴鏡が共伴する福井県深山寺2号経塚例がある。

以上が，山上寺出土鏡の埋納期を13世紀前半とする根拠である。　　（綿　貫）

第7表　紀年銘経塚（経筒）と共伴鏡の出土年表



※関（1959）を元に加筆して作成した。

2）出土銭貨の埋蔵時期

本出土銭貨が埋蔵された時期は，最新銭が嘉定通寶（1208年初鋳）であることから西暦1208年以降であることは間違いない，また大量一括出土銭貨の時期区分については，備蓄銭研究の分野でもっとも盛んであり，鈴木公雄氏によって備蓄銭内の最新銭初鋳年代により上限年代を設定する時期区分がなされ，それに対応するおおよその年代が与えられている[13]。

鈴木氏による時代区分を紹介すると，南宋の皇宋元寶（1253年初鋳）ないし咸淳元寶（1266年初鋳）が最新銭のものを一期として最古の備蓄銭とし，元の至大通寶（1310年初鋳）が最新銭のものを二期とする。以下同様の考え方で，三期は明の洪武通寶（1368年初鋳）をもつもの，四期は同じく永樂通寶（1408年初鋳）を最新銭とするもの，五期は李氏朝鮮の朝鮮通寶（1423年初鋳）をもつもの，六期は明の宣德通寶（1433年初鋳）をもつもの，七期は琉球王朝の世高通寶（1461年初鋳）・大世通寶（1457年初鋳）ないしは15世紀中頃までに鋳造された安南王朝銭貨（大和通寶，延寧通寶など）のいずれかを最新銭とするもの，八期は明の弘治通寶（1488年初鋳），同じく嘉靖通寶（1522年初鋳），さらに15世紀後半に鋳造された安南王朝銭貨（洪順通寶，光順通寶，洪德通寶，景統通

寶など）や琉球王朝の金円世寶（1470年初鋳）といった銭貨のいずれかをともなうもので，これを備蓄銭の最末期としている。

これによると本出土銭貨は，第一期にあたり，13世紀後半の第四四半期を中心とした時期が対応する年代として設定されている。ただし最新銭の初鋳年が，鈴木氏の基準とする皇宋元寶や咸淳元寶よりも約50年ほど古いこと，13世紀初鋳の銭貨が開禧通寶（1201年初鋳）と嘉定通寶（1208年初鋳）の２種しかないことなどを考慮すると埋蔵時期は13世紀代に限定して考えるのが妥当であろう。

（後　藤）

3）山上寺跡出土品の埋納時期のまとめ

これまで，鏡と銭貨の埋納時期に言及してきた。その結果，銭貨では13世紀代，鏡では13世紀前半とそれぞれの埋納年代が推定された。そこで山上寺跡出土の一括遺物（鏡・銭貨）の埋納年代を，松喰鶴鏡の流行時期等から考えて13世紀前半と考えておきたい。

（綿　貫）

4）山上寺跡埋納品の性格

日本の鏡は，古くより中国歴代王朝期の鏡が流入し，和鏡の成立に際してその影響を強く受けている。そしてその用途は主に墳墓への副葬・池へ投入・経塚への埋納・神社や寺院への奉納・経塚以外の埋納など，宗教的行為の中で用いられている。このような鏡をめぐる発見状況のなかにあって，山上寺跡出土の遺物も埋納されていた。しかも発見者からの御教示によれば器の中に入っていたとされる。こうした出土状況からみると，上述したうちの墳墓・経塚への埋納・墳墓や経塚以外の埋納のうちいずれかとなる。

こうした３つの可能性のうち，山上寺跡出土品を墳墓や経塚に由来すると考えた場合，鏡（墳墓の場合）と銭貨（経塚の場合）の量が多すぎるという問題がある[3]。以上のことを踏まえて墳墓や経塚以外の埋納品の類例を観察し，山上寺跡出土品の性格を探ってみたい。

広島県帝釈峡橋野呂第２号洞窟ではおおむね南北に並んだ２基の石囲炉状遺構から出土する（河瀬1978）。北側の石囲いの中と周囲からは，鉄鍋，鉄鎌，鉄包丁，貨幣約12枚，鉄製円盤（鏡？）が出土し，南側石囲いの中からは，方形の箱に入れていたかのように和鏡２枚，貨幣約120枚，鉄小枝が出土していた。16世紀終末の和鏡と慶長通宝の存在からみて，1596年以降17世紀初頭の遺構・遺物といえる。

大分県深水邸遺跡では，土坑内のうち備前焼大甕の内外から出土した（村上・吉田・今泉1989）。甕内からは，貨幣58枚，呑口式鉄刀，和鏡，鉄鉈，鉄錐，白磁片が置かれ，この上に鉄輪（五徳）とこれに掛けた状況で鉄鍋が見つかった。鍋の中には土師質小皿58枚が入っていた。甕の上には石蓋を置き，更に上鍋がふせた状態で置かれていた。甕外からは，小皿９枚，鉄斧，銭貨，弓の痕跡が見つかった。報告書は出土遺物から14世紀代の年代を与え，名主層かそれ以上の層の資材と理解されている。更にその性格として「特殊な性格」を考えている。

この他，大分県由布嶽山麓遺跡では江戸末期に位置付けられる埋納物がある。ここでは羽釜の中に数千枚の貨幣が入っていた[4]。

これまで見てきた３遺跡は，鏡が伴出する・しないはともかく，貨幣が経塚出土の場合と異なって異状に多いことが注意される。したがってそれらは経塚とは別の意味を内包した遺構・遺物と考えるのが自然であろう。こうした遺物の用途を考えるとき思い起こされるのが，いざなぎ流陰陽道である。いざなぎ流陰陽道では「呪詛」と呼ばれる人間や家の罪穢れや不浄，悪霊邪神などの障りを残らず幣に取り集め，本来の清清な状態に戻すのである。更に呪詛のついた幣は専用の捨場や，川，河原の岩陰で五印鎮めの印を結んで埋めたり，流したりしている。この際，湯をはった鍋に貨幣・米を入れ，魔を祓い吉凶を知る米占の場面がある。また，陰陽道の呪術で善悪を判断する盟神探湯の際にも鍋が用いられていたことは有名である。この他，近世・近代の葬制に「鍋被り人骨」がある。この場合は癩病など異常死した人間の不浄を封じ込める意味を鍋は持っていたのである。

一方，鏡は神・仏の御正体として用いられた他，諸願成就・病気平癒の願を結び入れて神社・仏閣に奉納されたり，御洗池などの湖沼に投下されている。この他深水邸の場合では鏡が，斧・鎌・鉈・刀・土師器・弓（痕跡）

とともに埋納された状況で見つかっているが，これらについても修験道採燈護摩における，護摩木製作・法弓作法・法剣作法・弊作法・闍伽作法の際に同様な器具が用いられている。

このようにみると，広島県や大分県の事例が墓でないとすれば，陰陽道，密教，修験道の呪術・修法に関わる法具と考えるのが自然であろう。またその法具組成の違いは，呪術・修法の「行われた時期」や「内容」によっても異なっていたのであろう。いずれにしても，人々の「諸願成就」・「祈願」・「占い」の際に用いられたり，「障り」を封じ込める際に用いられた法具を，埋めることによって，それを鎮めたのであろう。祭事に一度使用した器物を一括廃棄や使用停止するという行為は，宇佐神宮弥勒寺などでも行われていた。例えば弥勒寺の土坑内から，質や法量が同様な土師質土器がほとんど割れのない状況で見つかっていることからも判る。ともあれ，前記した広島県・大分県の遺跡付近には，帝釈峡，八面山，由布・鶴見嶽といった霊場が控えていることも，埋納品の背景を考えるときに示唆するところが大きい。

以上のような背景の中で山上寺跡出土の鏡と貨幣はどのように考えられるだろうか。たしかなことは判断できないが，現状では修験道・密教・陰陽道の修法・呪術に際して用いられ，埋めることによって鎮めたものと考えたい。その理由としては前述したように，それら多量の遺物が一括して丁寧に埋納されていたこと[3]と，その量が経塚の場合をはるかに超えていたからである。加えて貨幣を備蓄銭とするにはその量が少なく，鏡が確実に共伴するという問題があり，更に，鏡6面・貨幣約800枚という量と，「本堂・護摩堂」等の主要堂宇があったと推定される造作面の隅から出土していることからみて墓と考えにくい面があったのである。

以上，はなはだ簡単ではあるが山上寺出土遺物の性格を考えてみた。今後の課題としては次のことがある。まず，50年以上も前に鏡や銭が見つかったとき，それらは「器のようなものに入っていたきがする。」と発見者の一人広瀬キンさんの言う「瓶」がどのようなものであったかか，破片を探索する必要があろう。合せて山上寺跡の発掘調査を行い，山嶽寺院の実態を今すこし詳らかにする必要があろう。それらの結果によっては，埋納された鏡・銭の性格や背景がよりはっきりしてこよう。今後の調査に期待したい。

（綿　貫）

注

(1) 櫻木（1992）

(2) 鈴木（1992）

(3) 管見によれば，経塚から出土する銭貨で最も多いのは長野県秋宮経塚（室町時代）からの139枚である（関1988）。経塚からの銭貨の枚数は，通常20枚以内である。

(4) 村上久和氏の御教示。

(5) 鏡表面の付着物から，和紙につつまれていたことが推定きれる。

参考文献

王士伯（入倉徳裕訳）1991「中国陽燧鏡」『古代学研究』124，古代学研究会刊，京都，P21-26

河瀬正利1978「6 帝釈峡遺跡群の分布調査」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』I，広島大学帝釈峡遺跡群発掘調査室刊，広島，P.34－39

久保智康1986「古鏡の美」福井県立博物館刊

櫻木晋一1991「九州地域における中・近世の銭貨流通－出土備蓄銭・六道銭からの考察－」「九州文化史研究所紀要」36，九州文化史研究所（九州大学）刊，福岡，P87-122

櫻木晋一1992「北九州八幡西区本城出土の備蓄銭」『古文化談叢』27，九州古文化研究会刊，北九州

鈴木公雄1988「出土六道銭の組合せからみた江戸時代前期の銭貨流通」『社会経済史学』48－4，東京

鈴木公雄1989「州土六道銭の枚数と墓の保存状態」『考古学の世界』新人物往来社刊，東京

鈴木公雄1992「出土備蓄銭と中世後期の銭貨流通」『史学』61－3・4，東京

関秀夫1979「経塚遺物の紀年銘集成」「東京国立博物館紀要」第15号，東京国立博物館刊，東京，P21－248

関秀夫1988「経塚－関東とその周辺」東京国立博物館刊　東京

永峯光一・春木豊・川崎義雄・内川隆1992「伊豆諸島出土・伝世和鏡基礎集世」「国学院大学考古学資料館紀要」第8輯，国学院大学考古学資料館刊，東京，P134－190

広瀬都巽1974「和鏡の研究」角川書店刊，東京

前田祥子・鍋原敏男1985「日本の古鏡－女装美のプロデューサー」大阪市立博物館刊，大阪

村上久和・吉田寛・今泉正子1989「三光村の道跡」「三光村文化財調査報告書」第1集，大分県三光村教育委員会刊，大分

著者不明1829「糎年礼実録」

補

孔祥星・劉一曼（高倉洋彰・田崎博之・渡辺芳郎訳）1991『図説中国古代銅鏡史』中国書店刊，福岡

西村強三1983「鹿児島県下に傳わる中国宋元時代の鏡」「九州歴史資料館研究論集」9，九州歴史資料館刊，福岡，P43－103

山上寺跡出土の鏡

図版 8

菖蒲双雀双蝶文鏡・竹垣菖双蝶文鏡

上段 菊花散双雀文金・下段 松喰鶴鏡

佐伯市城下町遺跡（旧天祐館跡）の調査

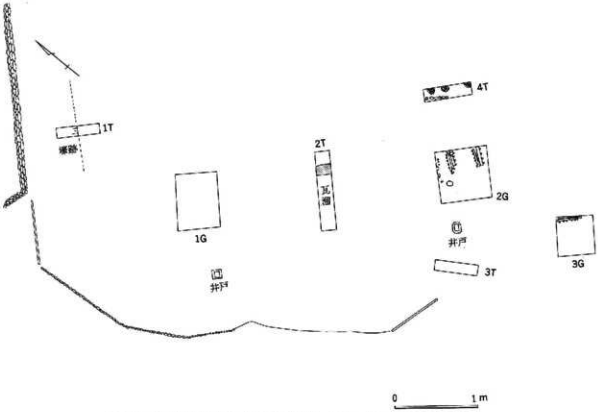
村 上 久 和

本調査地点は佐伯城三の丸跡の南側に位置し，明治四年頃発行の佐伯藩時代屋敷図に天祐館という屋敷が示されている。この天祐館は佐伯市教育委員会発行の『明治100年記念佐伯昔と今』に1862年に毛利氏の別邸として作られたとされている。

今回この地点に市立美術館建設が予定されている為，試掘調査を行った。調査はトレンチを４個所，グリッドを３個所設定し，行った。その結果，第１トレンチで三の丸高石垣に付属したと考えられる深さ３m以上の濠跡，第２トレンチで瓦溜遺構，第４トレンチで礎石建物跡および石列群・第２・３グリッドで一本造主木群，土壙等々の遺構を検出した。出土遺物は17世紀～18世紀の伊万里焼陶磁器碗，皿類，唐津焼陶器碗，皿類，備前焼スリ鉢等多数出土した。

今回の試掘調査では，出土遺物の時期から，絵図等に認められる天祐館以前の遺構が検出されたことになり，その立地から上級武士層の屋敷地の可能性が高く，今後，本調査および文献史資料等の検討を行わなければならない。

図版10　石列および礎検出状態



第53図　佐伯市城下町遺跡（天祐館跡）グリッド・トレンチ位置図

樽牟礼城跡関連遺跡発掘調査報告書

佐伯地区遺跡群発掘調査報告書

1994年3月31日

発行　佐伯市教育委員会
〒876　佐伯市中村南町1-1
Tel(0972)22-3111

印刷　佐伯印刷株式会社
〒870-91　大分市古国府1155-1
Tel(0972)23-0170